
遊戯王GXデュエルタクティクス

イルフレーム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王GXデュエルタクティクス

【Nコード】

N11111I

【作者名】

イルフレーム

【あらすじ】

デュエルアカデミアを卒業した女教師とハーレム状態の主人公がこの学園の変革の為に互いに寄り添い苦悩に挑みお互いを愛していく物語。

第0話 明日香の苦悩（前書き）

今回は少し暗い内容かも知れませんが。それでも読んで頂ければ嬉しいです。

第0話 明日香の苦悩

タイタニア学園。ここはデュエリストを育成する為の学校である。元々この学園は歴史と有名のある帝王学を取り扱う、貴族や優秀な技能と家柄を持つエリート専門の育成学校だった。

そんな高貴な身分の者の専用の高級学校であるタイタニア学園も時代と共にその形体をデュエルアカデミア方式に変化させていった。それによりデュエルアカデミアの平等教育の煽りを受けてタイタニア学園もこれまでの帝王教育から一般の平等デュエル教育にその体形をシフトしていた。

それに伴い貴族やエリート以外の一般の生徒も入学と編入ができるようになり。タイタニア学園は徐々に変革されるかに見えた。

だが、それにより今まで帝王教育を受けていた貴族とエリートの生徒が一般の生徒に対して格差による差別と組織的な苛めで一般生徒達を弾圧していく。

それでもタイタニアの教師達は見て見ぬふりをして、一般生徒達の苛めえの訴えや被害を揉み消して逆にその生徒達を罰していった。

それどころかタイタニアの教師達は事もあるが其れを利用して一般生徒達を更に弾圧していく。

その内容は主に苛めを利用した金銭の要求や性的暴行や性行為の要求等がある。更にはその事が逆に貴族とエリート達のタイタニアへの評価を上げる結果に繋がる。

つまり表向きは平等を重んじるデュエルアカデミアの新規参入校として有名を馳せ。その実、裏では教師と高級生徒達による一般生徒達への非道な弾圧が日々繰り返され続けていた。

そしてそのこと自体が貴族とエリート達にタイタニア学校を選ばせ

る要因になってしまった。

つまりタイタニアは裏ではその日々の弾圧行為を貴族やエリート達に全面的にアピールして新たな信者を獲得しているので有った。

勿論その事実デュエルアカデミアの最高責任者である海馬瀬人に伝わり、事態を重く見た彼は早急に事態の収集と解決を試みたが結果は状況を一時的に好転させるのが精一杯だった。

そう、海馬瀬人にも止めることが出来なかったのだ。タイタニアは形こそデュエルアカデミアの参入校だが。その実状は選ばれた血統を持つ貴族と一握りのエリートがそれ以外の他者を踏みつけるのを当然と考える。タイタニア学園の会長【王条留弗夫】と、その考えと姿勢を真っ向から否定する海馬瀬人と。対立関係にある。

だが、そんなタイタニアに賛同する学園もデュエルアカデミア側にも有った。

タイタニア学園の行っている貴族、エリート中心の教育と姿勢は以前のデュエルアカデミアが目指していたものであり。

全てはデュエルによる結果で物事が決まるデュエルアカデミアの基本姿勢そのままである。

実際にタイタニア学園の貴族やエリート達のデュエルレベルは一般生徒の其れを遥かに凌ぐものであり。

その実力は他の学園をも凌ぐとまで言われている。

それ故に実力のない者は強き者に逆らうことが出来ないのが。このタイタニアの掟なのである。

だが、そんなタイタニア学園にも希望が無いわけではない。

タイタニア学園の教師の中にもこの状況を変えようとする教師のグループが存在している。

彼等は言わばこのタイタニア学園におけるレジスタンス的なグループで有った。そのグループのリーダー的な教師として昨年からのタイタニア学園の教師として赴任してきた【天上院明日香】がグループを纏めていた。

だが、当然そんな活動をしていれば他の教師や貴族生徒達の家から

の集中的な圧力による圧迫に去らされていた。

それにより一般生徒どころか其れを助けようとする、彼ら自体が存亡の危機に追い込まれていた。

いくら彼らに大義名分が有っても彼らには味方になってくれる強力は後ろ楯がない以上。これ以上の長期に及ぶ抵抗は最早不可能であり、彼らのタイタニアでの立場も不全の灯火で有った。

「オイ、お前。なに俺の前を歩いてるんだ。目障りなんだよ！」

そうゆうと男はいきなり女子生徒の胸ぐらを掴み上げる。

「きゃ、なっ、なにするんですが！ やめてください」

女子生徒は掴んできた男子生徒の腕をか細く弱々しい手で掴んで必死で抵抗するがその瞬間。

「きたねえー手でさわるんじゃないやねえー！」

男子生徒のもう片方の腕から彼女の頬つぺた目掛けて鉄拳が放たれて、女子生徒の白く柔らかい肌を血の色で染め上げる。

「うぐわっ」

男子生徒は更に二発連続で同じ箇所鉄拳を浴びせかける。

「うっわっ、うっぱっ！ あっ、ひくっ、フン。なあ、なん、で私
が。……こん」

男子生徒は再び鉄拳を打ち放つ。

「ギャー！ うっぐぶわっ」

彼女は吹き飛び廊下に激しく打ち付けられて傷みにもがき苦しむ。
其れを見た男子生徒はほくそ笑むと。再び彼女に近づこうとした。
だが、其れを止める声があった。

「やめなさい！ 貴方今自分が何をしているのか分かっているの！
？」

その教師の力強く響き通る声に反応して男子生徒の足が止まる。
そして堂々とした態度で振り向きその教師に言葉を返す。

「ちい、天上院明日香か」

「安岡京介くん貴方どうして藤原さんにこんな酷いことをしたの？
！」

「フン、そんなの決まってるだろ。コイツが生きてるだけで目障りだからだ！」

安岡はふてぶてしくそう言っていると笑みを浮かべる。
其れを見た明日香はただ呆然と言葉を返す。

「そんな身勝手を下らないことでこんなにも酷い事を平然と貴方は
やったと言うの？」

「酷いのはこっちの方さ。見ろよこれ。コイツのせいで俺の腕と服
がきたねえー血で汚れちゃったぜ。
当然あとから治療費と責任を取って貰うがな。アツハハハ」

安岡のこの態度に怒りを押さえきれない明日香はすかさず。強烈なビンタを安岡にお見舞いした。

「もう、いい加減にしなさいよ!!」

その声と共にパツチンと、強烈な音が廊下に響き渡る。それと同時に安岡は廊下に叩きつけられた。

そして痛々しく顔を押さえながら立ち上がり、そのまま逃げるようにその場を去ろうとした。

その時安岡は捨て台詞を残していった。

「うぐっ、お、覚えて桶よこの俺に。安岡グループ次期会長にこんな事をしてどうなるか覚えてろよ!」

「ハア」

明日香は其れを無視して軽く溜め息をした。そのあと血塗れで廊下に倒れている藤原に手を差し伸べて、ハンカチで優しく血を拭って肩を貸す。

「藤原さん大丈夫？　じゃないわね。……ごめんなさい。私達の力が足りないせいで貴方達に辛い日々を過ごさせてしまつて。本当にごめんなさい」

明日香は藤原の手に自分の両手を重ねて申し訳なさそうに藤原の目を見詰めて謝罪をした。

「そんなことないですよ。明日香先生が居てくれなかったら私達はもっと酷い目に合ってますよ。」

それに今だって明日香先生が来てくれなかったら。

私今頃死んでいたかもしれませんから。

先生は私を助けるために苛めの標的を自分にしてまで私を助けてくれました。

どうして私の為にそこまで？」

藤原のこの言葉に明日香は更に顔を歪めて申し訳なさそうに答える。

「だって、私にはそんなことぐらいしかできないから。……ッ、さあ、保健室に行きましょ。藤原さん」

「は、はい」

二人はそうゆうと互いに肩を寄せ合いながら保健室に向かって歩いていった。

第0話 明日香の苦悩（後書き）

次回第1話【明日香の目に映る希望】お楽しみに

第1話 明日香の目に映る希望

傷付いた藤原と共に保健室に向かった明日香は。藤原を保健室に預けて、そのまま職員室に向かう。

（ちなみに保健の教師の【芹沢綾音】は明日香と同じレジスタンスグループの教員の一人で、明日香だけではなく一般生徒達からの信頼も高い、不平等を嫌い真面目で優しい絵に書いた様な理想家の教師である）

そして、職員室では先ほどの安岡に対する明日香の暴力行為がすでに他の教師達の知るところとなっていた。

「これはこれは、明日香先生。先ほどは随分と理不尽な事を生徒にした様ですな。かわいい顔してよくやる。おーこわ」

この嫌みたらしい男の名は【滝沢龍夫】このタイタニア学園の教頭であり明日香のグループと真っ向から対立する教師の一人でもある。

「何のことですか、滝沢教頭？」

明日香は少し怖い顔で滝沢の顔を見詰めて、少し怒ったような口調で言った。

「何のこと？　これは問題発言ですぞ。このタイタニアの教師がなんの罪も無い生徒を理不尽にも卑劣で一方的な暴力で傷付けたにもかかわらず。事もあるうか、それを何のこと呼ばわりとは。これでは明日香先生は教師失格ですな」

滝沢は小馬鹿にした態度で明日香を非難している。
この態度に明日香は少し頭にきた様子で反論を始める。

「誰がどうゆう風に言ったかは知りませんが。私は人に非難をされる様な教師として恥ずかしい事は何もしていません。
それにその生徒は男子で有るにもかかわらず、女子生徒を一方的に暴行して傷付けていました。
なので私は自分の判断で教師として正しいと信じる行動で、その生徒を止めました。その生徒の名前は敢えて出しませんが」

「ほう。これはこれは。私の聞いていた事とは大分違いますね」

「え、」

思いもよらない滝沢の返事に明日香は一瞬驚きを隠せず、声を漏らしてしまう。

「私の聞いて話ではその男子生徒は女子生徒に逆に暴力を振るわれ、金品や財布を奪われそうになりやむを得ず。自衛の為に暴力で自身を守った、と。聞いています」

この嘘だらけの言葉に当然のように明日香は言葉を荒立てて反論した。

「それはどうゆう事ですか？ 藤原さんは暴力なんか振るっていません。

それは全てデタラメの嘘です。私が証拠です」

明日香は必死に藤原の無罪を視聴したが。滝沢はそれを鼻で笑う。

「貴方が証拠？　フツ、残念ですが貴方に証人としての資格はありませんよ」

「え、それは一体どうゆう事ですか？」

「決まっているでしょう。貴方には藤原咲見の共犯の疑いが掛かっているからですよ」

滝沢からのあり得ない発言に同様と驚きを隠せない明日香は今まで以上に声を荒立てて必死に藤原と自分の弁護をする。

「一体どうゆう事ですか？　教頭ともあろう方が、そんな根も歯もない嘘を信じると言うのですか？」

「根も歯もない？　ぷ、これはこれは明日香先生は日本を代表する企業の一つである安岡グループの後継者よりもご自分の方角証拠能力が有るとおっしゃるのですか！！
これは大いに笑えますね。アッハハハハ」

滝沢は散々明日香に嫌みを言う人目も気にせず、声を荒立てて笑う。

そしてそれに苛立ちを募らせた明日香は敬語は使っているが普段と同じ剣幕のある強気な態度で滝沢に反論をする。

「教頭こそ、人を生まれや立場でしか見れないのですか？ 教頭がその様なことを軽はずみに口にする、このタイタニア学園その物の沽券が疑われます」

「なに！」

「つまりタイタニアの教師は生徒を平等に指導するのではなく、逆に立場の強い生徒やその家族の言いなりになって、不平等を先導して生徒達の格差を広げているとゆう事になります」

明日香のこの反論の内容に滝沢は当然、激怒する。
だが、明日香とは違って、落ち着いた態度で滝沢は明日香に返事を返す。

「フン、屁理屈は其れ丈ですかな？」

「屁理屈？　なにが屁理屈何ですか！」

明日香の口調はどんどん激しさを増していく。

「全てがですよ」

「な！」

「明日香先生、貴方の言ってることは責任転換以外の何物でもない。貴方は先ほどのタイタニアの格差を広げているのは強い立場を悪用している教師だと言いましたね」

「ええ」

「ならば、お分かりでしょう。貴方自信が教師としての立場を利用して無関係な女子生徒を使って、ただ大企業の御曹司とゆうだけで安岡京介くんを襲わせて金品を盗ませ。其をご自身の懷に納めるとは。」

我々のような真っ当な教師には思いもよらない、恐ろしい考えです。もっとも盗みを働いたのは彼女のアドリブかも知れませんがね。

もしかすると貴方はわざと彼女を安岡に殴らせるように仕組み、その現場を押さえてあなた方平等教育の会の正当正をアピールする為に今回の事件仕組んだものではあり」

滝沢が言い終わる前に明日香の忍耐の上限値が限界に達してしまった。

「もう、いい加減にしなさい!!」

「なっ!」

「さっきから黙って聞いていれば、言いたい放題。」

教頭! 私はなんと言われようが構いません。

ですが、何の関係もない生徒を不当に処分する事だけは絶対に許し

ません!!」

明日香は今までとは想像も着かない程の剣幕と迫力で滝沢に言い付ける。

その迫力に流石の滝沢も赤面を喰らってしまう程だ。

「い、良いでしょう。

貴方がそこまで言うのなら、藤原咲見は今回ノーベナルティとゆう事で」

「ハアア。よかった。彼女が無事で」

滝沢の言葉に安心してホッとする明日香だが。次の一言で再びその表情は凍り付く。

「ただし、貴方には責任を取って今月一杯でやめて頂きます」

「な!」

「当然ですよ。藤原咲見はともかく貴方が安岡京介に暴力を使ったのは紛れの無い事実。

そしてその件で安岡家から貴方を告訴すると言ってきています。

勿論我々としてもその様な不名誉は望んでいない。

幸い先方も貴方さえこの学園からいなくなれば、これ以上大事にはしないと言っています。

勿論貴方が素直に承諾していただければ我々も藤原咲見には何のベナルティも与えません。それで宜しいですか？」

当然この提案は一方的に理不尽だが明日香としては藤原を人質にされている以上を従わざる終えない。

「くう、異論ありません。ですが」

「わかっていますよ。藤原には一切罪は問いません。それに貴方も解雇ではなく転勤扱いで……そうですね。貴方には元のデュエルアカデミアに行って貰いましょうか。

そう言えば明日香先生はアカデミアの出身でしたね。古巣に戻れて明日香先生に取っては幸運でしたね」

「私がデュエルアカデミアに！？」

突然の出来事に戸惑いを隠せない明日香の表情を見て滝沢は明日香の肩を軽く叩き、彼女に再び現実を告げる。

「そうです来月から貴方はデュエルアカデミアだ。
アカデミアでは醜い女のヒステリーを見せないように精々頑張ってください。

アッハハハ」

明日香は少しムツとしたが、滝沢はそれを無視して職員室を後にする。

そして、明日香はそのまま自分の机の椅子に座り、先ほどの滝沢の言葉とこれからの自分の行き先について考えていた。

「（来月から私はデュエルアカデミアの教師。

またクロノス先生やトメさんと一緒にいられる。

今度は教師として皆と一緒にアカデミアで働ける。

もうこの学園のように辛い思いをする生徒を見なくていい。

もう辛い思いをする生徒を助けられなくて泣くこともない。

もう辛い思いはしたくない。楽になりたい。

優しいアカデミアの皆の所に帰りたい。

……………もう辛いのは嫌）」

明日香は切ない表情を浮かべて、その目に見え始めたアカデミアと
ゆう希望にすぎるように現実逃避をしていた。
その目に大粒の涙を浮かべながら。

第1話 明日香の目に映る希望（後書き）

次回第2話【入学式】お楽しみに

第2話 入学式（前書き）

皆様長いこと更新をストップしていて、誠に申し訳ありませんでした。

言い訳になりますが。

今まで体調を崩していてなかなかまとまと小説を書けませんでした。そして、今ようやく体長も元に戻って来たのでようやく、更新出来ました。

今まで本当にすいませんでした。

これからはできる限り早め早めの更新していくつもりですので、これからどうか宜しくお願い致します。

それとまだデュエルは有りませんが、もし良ければ感想等ご指摘などが有りましたら、送って頂ければ幸いです。宜しくお願い致します。

第2話 入学式

放課後、職員室で自分の机に肘を着いて泣き濡れている明日香に優しい声で包むように話しかける紅い髪の女性の姿があった。

「明日香、アカデミアの件、聞いたわ。その……、明日香、泣いてるの？」

その言葉に明日香は慌てて両手で涙を拭き取り、作り笑顔で振り向く。

「ち、違うわ、泣いてなんかいいわよ、綾音」

明日香のあきらかに同様を隠せていない、挙動から明日香の心情を理解した綾音は、軽く笑みを浮かべ、優しい態度で明日香に接する。

「そう、それなら良いけど。明日香、貴方はいろいろと一人で思い詰めて一人で解決しようといつも無茶をして、結局いつも貴方自身が苦しみと重圧に押し潰されて辛い思いをするんだから、心配なよ」

綾音は少し辛い表情を浮かべながら、明日香を見詰めて、そうゆうと明日香は。

「大丈夫よ、だって一番辛いのは生徒の皆なんだから。それに私がこの学園から出ていかないと藤原さんが見に覚えのない罪で罰せられる事になるわ。」

それに私が居ても居なくてもあの子達に何もしてあげれないし、どうせこのままだと私達はこの学園から追い出される。

だから、それが早まることで藤原さんが救われるなら、私はこの学園の教師としてあの子達に最後の振る舞いをするだけよ。それがあの子達にできる、今の私の精一杯だから」

明日香はその目に先程拭き取った涙を、再び浮かべると切ない表情で少し感情的に綾音にそっくり放った。

「それが心配だって、言ってるんじゃない。それに明日香、貴方自分が犠牲になればこの件が丸く収まると思って居るの。」

アンタが居なくなれば、安岡や他の貴族やエリート生徒達の藤原さ

んや他の一般生徒達への弾圧が更にエスカレートして、続くだけよ」

綾音の優しくも少し冷たいこの言葉に明日香はノイローゼにも似た表情でおもむろに口を開く。

「それでも、それでも藤原さんは助かるわ」

「そして明日香、貴方はめでたく念願のデュエルアカデミアの担任として勤務できる。

良かったわね、明日香。

それでも貴方は辛い思いをして悩み、それでも生徒達を助けられない無力な自分を見て自暴自棄になることもない。

これで貴方は解放される。解放されて自分を大事に大切にしてくれる、アカデミアの自分に優しい先生達の所に戻るわね」

綾音は先程にも増して冷たく厳しい言葉を明日香にかける。

それに対して明日香は驚きを見せながらも先程の表情のまま、綾音に反論を始める。

「な、なにゆうのよ。
私はそんなつもりは」

「ないのね？」

「で、でも。私に一体何が出来るってゆうの？ 私に誰が救えるってゆうの？

私はこの学園に来てからの一年、あの子達の為に必死に戦ったわ。でも、結果はいつもあの子達を余計に傷付けるだけ。そして、最後は今のこの有り様。私にあの子達を救う力なんかない、私にこの学園を変える力なんてないのよ。

だから私はここに居ても何の意味もない、居ない方角良いのよ。それが今まで無力だった、私のあの子達への」

明日香が言い終わる前に綾音は明日香の両方をつかみ、言葉を荒立てて少し焦りの見える表情で明日香に説得の言葉をかける。

「どうしたのよ、明日香。いつもの貴方らしくもない。普段の貴方ならこんな事ぐらいであきらめたりしない、自暴自棄になったりしない。

この学園に来た時の貴方は私達の誰よりも生徒達に対して、自分自信に対して素直で真っ直ぐだった。

私達はそんな貴方を見て、そんな貴方に勇気貰って、生徒の皆の為に頑張ろう、この学園を変える為に戦おう。

そして、自分と生徒の皆が心から素直でいられる様に、心から自分を素直に教師だと胸を張って誇れるように自分にも生徒にも嘘を付かずに、逃げずに戦おう、逃げずに生きよう。

そう決めた。何よりそれが貴方の意思だったはずよ。ちがう？」

「違うわ、で、私がこの学園から出ていかないと藤原さんが」

「明日香、貴方は良くこう言って居たわ。

何があっても自分を信じて頼ってくれる人が居るなら、どんなに絶望的な状況でも最後の最後まで可能性と、共に戦う仲間を信じてあきらめないで未来の為に戦う。

それがある人が身を持って私に教えて暮れた一番大事な事だからだって、言っていたじゃない。忘れたの明日香？」

綾音が語る以前の自分の理想と姿とそれを語る友人の姿を今の自分と比べて余りにも違う、今の自分に言いようもない感情と涙が押し押せて来た明日香は声にもならない声を出してその場に立ち尽くす。

「あっ、あ、え、（は、私はあきらめることを藤原さんのせいにして全ては藤原さんの為と自分を正当化してた。あげくの果てに私は

あの子達を助けられなかった事を無力を理由にそれ以上何の努力もしないで無力を肯定して、それを理由に自分自身の可能性に目を瞑り、身勝手にも自分の辛さだけを理由にあの子達を見捨てて、自分だけ優しく温かい自分の居心地の良い所に自分に一人だけ、逃げようとした。

なのに綾音はそんな私を見捨てないで私の為にこんなに真剣に私を叱ってくれている。

今も私や生徒の皆の為にこんなに必死に真剣に教師として頑張っている。

なのに私は……なにしてるんだろう）……あ、ありがとう、綾音ね。私間違ってた、でも、綾音ねのお陰でそれに築けた。今までごめんなさい。そして、本当にありがとう。

もし良ければこれからもこの学園の教師として、親友としてまた私とこの学園の生徒の皆の為に一緒に戦って暮れるかしら」

明日香は綾音の心からの親身な説得を受けて改めて自分の間違いに気が付いた。そして、それを素直に認めてそれを悔やみ、その事を自分に真剣に伝えて暮れた綾音に対し、心から感謝をします。

そして、これからは綾音と共にあきらめずに最後の最後まで弾圧を受けている生徒達の為に戦い抜く事を胸に誓い綾音に手を差し出す。綾音はすかさずその手を握り笑顔で微笑み明日香に答えを告げる。

「勿論、最初からそのつもりよ。

それに入學式。新しく入ってくる貴族やエリートの生徒の中に話の分かる物分かりの良い生徒が入ってくるかもしれない。

そして、その生徒かもしれないその生徒の家族やスポンサーが私達の

後ろ楯になってくれるかもしれないわよ。

そして、その後ろ楯が強力で有れば有るほどそれを糸口にしてタイタニアの堅物連中に対抗する事も不可能じゃないわ。

それに、それが上手くいけば私達の不当な解雇も防げるし。その上アンタがやめなくても藤原さんを助ける事も出来るかもしれないわよ。

いや、できる、絶対に出来るわ。だからあきらめるのは早すぎるわよ明日香」

先程間での自分とは違い淡々と前向きに希望と可能性を語る綾音を見て思わず、笑いが込み上げてくる明日香は綾音に悪びれもせず、思いのままに笑をもらす。

「アッハハハハハ。綾音貴方を見ているとなんだか今まで悩んでいた自分が馬鹿らしく思えて来たわ」

だが、綾音自身は至極真面目に話して居たために冗談と思われて笑われたことに酷く怒っている。

「明日香、何よその態度は折角人が真面目にこれからの戦略を話しているのに何で笑うのよ!!」

「い、ごめんなさい、でもあんまり可笑しいからついね」

「だから、何が可笑しいのよ明日香!？」

それから明日香は一時間以上も綾音に怒られ続けたが、ようやく綾音も満足して職員室を後にすると明日香は自分の机の椅子に座り。そのまま『ある一人のデュエリストの事を考えていた』。

「絶対に最後の最後まであきらめないか。……ハア。もしアイツなら、十代ならこの学園の皆を救えるのかしら。

十代ならこの絶対な状況でもあきらめないで戦えるのかしら。……十代なら、十代だったら最後まで自分で居られるのかしら。十代なら、十代なら」

結局明日香は答えを出せないまま机にうつ伏せになりその眠りにつく。

そして、夢の中で明日香はその思い人の声を聞く。

「明日香、明日香、おい、明日香ってば。起きろよ、こんな所で寝

てると風邪引くぞ」

「（じゅ、じゅ…だ…い？　十代！！　どうしてここに？　えっ、だ、駄目、声が出ない）」

「おい、どうしたんだ明日香。久し振りだってゆうのに。まさか俺のこと忘れたのか？　まあ、冗談はともかく本当に久し振りだな、元気にしてたか？」

「（元気か、じゃないわよ。十代アンタ私に何したのよ？　声だけじゃなく体も動かないじゃない。もしアンタの仕業ならただじゃおかないわよ覚悟なさい）」

「明日香、念願の教師になったんだってな。聞いたぜ、おめでとう明日香。やったな」

「（あ、ありがと。アンタからそんな風にお祝いされるとなんだか照れ臭いわね。でも、私そうゆうの嫌いじゃないから。べ、別に嫌いじゃないだけだからかんちがいしないでよね！！）」

「でも、頑張らないといけないのは、これからだぜ、明日香！！
俺は教師じゃないから偉そうに言えないが、時にはつまずき挫折するようになることもあると思う。」

中には一人で解決出来なくてどうしようもなく落ち込んで、絶対してしまいう時も来るかもしれない。

けど、そんな時は思いっきり仲間に甘えて仲間に頼ってもいいんだぜ、明日香。お前は昔から仲間の為に自分一人で悩んで一人で解決しようとする無理も無茶もするからな、回りの仲間はいつも心配してんだぜ」

「（一番無茶するアンタにだけは言われたくないわよ）」

「勿論、俺も心配してんだぜ、明日香」

「（え、ほんとに？）」

「だから、本当に辛いとき位は一人だけで悩まないで仲間に頼って、仲間と一緒に戦っても、一緒に泣いても良いんだぜ、多分お前の仲間達も俺と同じ事を思ってる筈だ、明日香。」

だがら、これからががんばれ。大丈夫お前ならどんなに絶対的な状況だって乗り越えられる。

だって、お前は明日香なんだ。ガツチャ、がんばれ明日香」

「ちょ、ちょっと十代。

待ちなさい、説明になってないわよ!!」

そこで明日香は目を覚ます。

「ゆ、夢。……そ、そうよね。でも、十代の奴夢の中でも私の知ってる十代だった」

そうゆうと明日香は安心してため息をはく。

「ハア、やっぱり、十代はどこに居ても十代だった。……私もどこに居ても、どんな状況で、私は私そうよね十代」

明日香は今日初めて見せる満面の笑みで微笑むと、そのまま笑顔でタイタニア学園をあとにして自宅へと帰っていった。

そして、次の日の入学式の朝。

明日香と綾音が待ち望んで居た人物がついに現れる。そして、その人物と明日香との出会いがこのタイタニアの運命と明日香の運命を大きく左右することになるとは、今の明日香もタイタニア学園も知る良しはなかった。

第2話 入学式（後書き）

次回第3話 演説 お楽しみに

第3話 演説（前書き）

皆様いつもお読み頂き誠に有り難うございます。

できる限り早い更新していくつもりです。

遅くとも3日以内のペースで更新していきますのでこれからもどうか宜しくお願い致します。

それと今回からようやく主人公が登場します。

かなり変わった主人公だとは思いますが受け入れて貰えれば幸いです。

第3話 演説

翌日、タイタニア学園では新一年生の入学式が専用の大広間で執り行われていて、数多くの新入生とそれを出迎える、二年、三年の生徒達と教員達でごった返していた。

そんな中、金髪のセミロングで色白の可愛らしい少女がその細長くか細い腕を大勢の人混みの中、飛びはねながら幾度もふり一人の少年を呼び寄せる。

「ランー、ランってば。こっちこっち。遅いよ。速く来て、こっちこっち」

その声に従い少女の元に『ラン』と呼ばれた背丈が長く黒髪の顔立ちが良いクールで落ち着いた雰囲気少年が駆け付ける。

「どうした？ 別に人が多いことに緊張や驚きを感じる教訓でもないだろ。」

それとも、その様に振る舞って他人の視線を楽しむ趣味でも開化させたか、玲奈？」

少年のこの不躰な台詞に少女は少し膨れっ面で皮肉を返す。

「ちがうよ。もう、ランってば、どうしていつもそうなの？ 私はただランと一緒に居たいから呼んだだけなのに。ランって私のこと本当に好きなの？」

彼女がそうゆうのも無理もない、彼女の名は【矢月玲奈】矢月財閥の矢月新一郎の一人娘でこの少年【須藤蘭】の婚約者で6年以上もの間共に過しているにも関わらず。ランはいままで一度も玲奈に恋人らしいことはしておらず。精々手を繋いだり、お姫様だっこをするぐらいでそれ以外には特に何もしていない。

だが、玲奈はそれが気に入っておらず。今以上の関係の躍進を望んで積極的にランにアピールするも今のうちにランは有り得ないような返事を返すばかりで一向に玲奈が望むような返事も好意的な態度も返ってこなかった。

そしてそれが玲奈の不安を駆り立てて想像の翼を羽ばたかせる。

詰まり、ランは自分のことは愛しておらず、単に制約結婚で自分と居るだけで実際は別の女性に恋い焦がれているのではないのかと、日々胸を痛めている。

実際、ランには玲奈以外にも数多くの婚約者の候補が存在していて、その多くは日々、隙さえあればランに近づき取り入ろうとしている。更にはそれ以外にも数多くの女性がランの地位と財産目当てに日々、迫りよって来ている。

それが玲奈の悩みの原因でこのままではランはいつかは自分を捨て

て他の女性と結婚してしまうのではないかと。考えて自分自身を苦しめていた。

そんな玲奈にランは笑みを浮かべて優しく甘い言葉を玲奈にかける。

「少なくとも、玲奈のお父様や他の婚約者候補の男子よりも遥かに玲奈を好きで居たいし。その自信も有るつもりだ。

そして、玲奈が望むなら互いに互いを愛し合って、その上で夫婦の高見に一緒に行きたいといつも考えている。

だから俺は俺を好きで居る玲奈が好きだ。玲奈もそうだろう？」

この一見女滴としか思えない台詞を述べている、【須藤蘭】とゆう少年はこの物語の正統な主人公であり、世界有数の大企業『須藤財閥の後継者の一人である』。

「ええ、も、もちろん私もランが好き、大好き。誰よりも愛してる。だから今ここでキスして、ね」

今まで待ち続けた言葉をあっさりと言われた為に一瞬、頭が目眩にも似た軽いスタン状態になった玲奈だが。

ほっぺを赤らめて、すぐに正気に戻り、自分のランに求める欲望の一つを声を高らかにしてランにさらけ出す。

同時にその声は周囲にいた生徒達の注目も集めてしまい、今玲奈と

ランは周囲の生徒達の視線の中心角となっていた。
そんな中ランがおもむろに口を開く。

「今ここではできないな」

「ど、どうして!! 人前じゃ私とはキスなんか出来ないってゆうの!？」

玲奈の無理もない反論にランは淡々と言い訳にも似た説明を返す。

「その認識は基本的には正しいがどうやら少し遅延が有るようだ。
俺はただ他の視線が有るところでは玲奈と愛情の確認は出来ない、
ただそうゆって居るだけだ。

古代より愛とゆう物は愛し合う者同士の特権であり、資格であると
ゆう。

つまり、資格の無い者に不用意にさらしてしまえば、愛は汚れ、墮
落し、最後には腐り落ちてしまうとゆう。

だが、俺は玲奈とそうはなるつもりはない。

幸いなことにそれとは逆に愛は顕著にそして、貪欲に強欲にふたり
で独占して燃え上がらせれば他人には一切手の届かない遥かな極地
に辿り着けるとゆう。

だから、俺は玲奈と共に高見を望みたい。その為にここでは玲奈と

の愛は去らさない。

それに何より、キスをするとうことは玲奈の行為の時の姿を人に
さらすことになる。

古代より自分の愛する人を平然となぶり、傷物にする者は人間社会
の歴史上では常に人間のクズであり、ゴミで有ると言われている。

俺は玲奈を愛するに辺り、その様な存在には何人があるうが成り果
て足りはしないと自分のプライドと玲奈の心に固く誓っている。

少し古くて堅苦しいかも知れないけど、玲奈にはわかって貰えると思
っている。だから、ここではレナえの愛を形にできない。すまな
い」

この時代さくご、としか思えない考えを平然と口にするランは当然
ながら普段からどんな事に対しても同様の考えで物事を判断して、
行動している為。

必然的にこのような考え方や言い方を、カッコイイと思っている様
だ。

そして、ランの女性に対するこの様な態度は周囲の男性達からは綺
麗事や理想を口にして女を騙す。

等と常に避難の対象になっている。

だが、しかし。女性達の反応はそれとは真逆の態度であるからして、
ランが如何に転生の女な滴であるか分かる。

当然、これまでの言葉を受けた玲奈の態度も同じである。

「ああ……。 (ランが私のことをそこまで深く考えて愛して暮れて
居たなんて。

私、今すぐく、しあわせ♪) うん、わかった。

でもラン、少し良い？」

玲奈は顔を真っ赤にしながら少しの間考えた後に少し可愛い声と態度でランに問いを投げ掛ける。
ランもそれを優しい口調と態度でその問いに答えようとする。

「なに？」

「今人前じゃ、ダメって言ったよね。ラン？」

「ああ、その筈だ」

「それなら、ここであければ良いんだよね？
だったら後で私の部屋に来て。
そうしたら、ふたりきりならキスしても、それ以上のこともして良いんだよね？ ラン」

玲奈は再び人前にも関わらず、過激なことを口にして周囲の注目を

集めてしまう。

勿論玲奈の態度も二人の立場や先程のランの言葉や態度を考えれば、至極当たり前の反応で有ると言える。そして、ランは顔を真っ赤にして期待に胸を踊らせている。玲奈に数多くの生徒達の殺意のある視線の中玲奈に淡々と答えを返す。

「ああ、勿論いいよ。

でも、俺も玲奈もまだ二十歳以下の未成年だ。

愛を形にするにしても未成年の責任の範疇で出来ることまでなら、そのルール伴って玲奈との愛に勤しむことを固く誓うよ。玲奈」

本来ならこの様な状況ではふさわしくない答えだが、玲奈はランと共に過ごした6年間の月日でランの今の回答はこの後、自分の部屋でのお楽しみをランが許可した事を意味していることを玲奈は素直に受け止めることができた。

「（それじゃ、最低でもキスやデーパーキスは確実にできるのよね。……やったー！！）うん、それじゃ後で、部屋で待ってるからね♪」

「ああ」

「あ、そう言えばラン。

さっきまで一之瀬くんが居たよ。

後で話そって言ってたよ」

「そうか、ありがと玲奈」

「うん、それよりもうすぐ入学式、始まるよ。ラン」

「ああ、分かってる。

入学式の間ずっと、隣で一瞬に過ごしたいんだろ、玲奈？」

「うん。（なんだちゃんと分かってるじゃない）」

このあと間もなくして入学式は始まり、いくつかの行事と教師の挨拶も終わり、残すは新生代表のこれからのタイタニア学園での意気込み等の演説を残すのみであった。

「それでは最後に、新入生代表、須藤蘭によるこのタイタニア学園でのこれからについて語っていただき終了と致します」

「出番だよ、ラン！！」

「ああ、でも、どうして玲奈が俺以上の張りきりを見せているんだ？」

「だって、ランは私の未来のダンナ様なんだから、当たり前でしょ！！」

「ごもつとも。それじゃ、未来の夫として我が愛しの奥様に恥を欠かせないように精々立派に後世に残る演説をして、我が身が真に玲奈の夫になるにふさわしいことを証明するでしょう」

「それじゃ頑張って、いいダンナ様になって帰ってきてね。ラン！！」

「ああ、それは大変そうだ！！ 行ってくるよ、玲奈」

ランは少し茶化してそうゆうと演説を行う為のマイクの前に立つ。

「それじゃお願い致します」

司会のその言葉にランは軽く頷き返事を返すと、おもむろに話し始める。

「ふっ、皆様はじめまして、今年の新入生代表に家名の力でして頂いた、須藤蘭です」

その第一声に司会と観客は驚きを隠せないでざわめいていた。

「ちょ、ちょっとラン。なに言ってるのよ。

私のダンナ様にふさわしい演説をするんじゃないやなかったの？」

「それではまず、最初に私のタイタニアと先輩の皆様に対しての、私の思うところの意見を言わせて頂きます。

私にはこのタイタニア学園とそれに属する生徒、教師のほぼ全ては。人間の皮を被った、犬豚同然の山賊にしか見えない。つまり、この

タイタニアの不正を行うお前達はただの、犬豚だ!!」

後にこの演説はタイタニアを変えた革命の始まりとしてタイタニア学園の後々まで語り継がれることになる。

そして、この少年須藤蘭と天上院明日香が会おうときこのタイタニア学園の変革への革命が始まる。

だが、今それを知るものは一人として居ない。

そう、革命をもたらす須藤蘭自身でさえ。

第3話 演説（後書き）

次回第4話 結果

お楽しみに

第4話 結果

入学式の朝、明日香は滝沢教頭に呼び出されて、この入学式が終わった後に正式に明日香のデュエルアカデミア転勤をタイタニア全校に発表すると宣言された。その事を明日香は絢音に伝えるために先に入学式に行っている、絢音の所に向かった。

「絢音、探したわよ。もう、約束の所に居ないんだから」

明日香が皮肉を口にすると絢音は慌てて明日香の口に手を当てて明日香の口をふさぐ。

「ちょっと、明日香。今良いところなんだから、静かにしなさいよ」

「ちょ、ちょっと。絢音!! うっ、ぐう」

そして、なにがなんだかわからない明日香はそのまま絢音に従いその場に立ち尽くして演説を耳にする。

「お前達はただの犬豚だ!!」

「ちよ、ちよつと。何なのよ絢音、これ？」

明日香は突然自分の耳に飛び込んできたランの演説を聞いて。驚きを隠せないで隣に居る絢音にことの説明を要求した。

「さあ、私にもわからないわ。でも」

「でも、なに？」

絢音は明日香の問いに若干の迷いはありながらも、自信を持って答える。

「ようやく見えた、私達の希望の光かも知れない。
いえ、きっと、そうよ。そうに決まってる」

絢音の少し短絡的な答えに明日香は正直なところ、そこまで短絡的に前向きには考えられないと思いつつも。

心の奥底ではランのこの声がこのタイタニア学園を変える、自分達を救う力になって暮れたらと。

明日香はその思いを胸に潜めつつ、ランの演説に淡い期待を抱く。

そしてランは淡々としかし堂々と自信の言葉に何の迷いもなく、口を開き話を進める。

「このタイタニア学園では高貴な家柄の者は自分自身の血統を優れたものと公言しているようだが。

私に言わせればそれはどうしようもない能無しの勘違いとしか言いようがない。詰まり、優れているのは血統でもなければ、家名でも家柄でもない。

ましてやお前達等ではない。

真に優れているのはお前達の家名の遺産を築いたお前達の先代で合っている。

決してお前達のような無能能無しの類いの恥知らずが、優れているのではない！！」

ランの高らかとした力強い演説に。一般の生徒や教師達はランの今の言葉に感銘していたが。

それ以上に貴族とエリート of 生徒達や教師達は当然ながら怒り猛り演説中にも関わらず、熱狂的にランに罵声を浴びせかける。

「おまえーなに言ってんだー！ 能無し of 無能はおまえだーー！！」

「そうだ、そうだ！！ それにお前だって立派な貴族だろうが。この能無し恥知らずの馬鹿が、お前さんが死しまえーー！！」

「そうよ、先祖の遺産を継承する事のなが悪いってゆうのよ！！ 一族が優れているならその家に生まれた私達皆、優れた人間に決まってるに決まってるでしょうが！！」

「テメーー1年の分際でホザいてんじゃねーぞー！！」

テメーー何ぞこの俺、安岡グループ時期会長の安岡京介様の足元にもおよびもしねーぞー！！ お前さんがこの俺の最強のスターシンクロデッキでイチコロよ。言いたいことが有るなら力でデュエルで示しやがれ！！ 口先だけのクス野郎が」

ランは今日入学した同じ学年の生徒だけではなく、入学式に主席していた2年や3年の生徒達にも激しい罵声を浴びせられてしまう。だが、当の本人のランはそんな罵声に一切動揺など見せていない。むしろ婚約者の玲奈が動揺と罵声に胸を痛めていた。

「（ち、ちょっとラン、何してるのよ。

なんであんなことを言っちゃうのよ。

他の人のほとんどはランのことをすごく悪く言ってるよ。

もしかしてランは、まだあの事を気にしているの？

あのとき私に自分は紛れの無い須藤の一族の人間だって言ったのに

」

そんな中、ランは罵声をした生徒達に侮辱以外の何物でもない演説を再び聞かせ始める。

「ハア、まさか本当にこのタイタニアの貴族の生徒がこれ程までに器量の低い者達立ったとは。流石に無能微細の身では分からぬのも必然か。

それならそれで構いはしないが、それに付き合わされる人達はたまったものではないからな。いくつか言わせて貰う。

まず、お前達は宣告の発言で自分自身で自身の名誉を損ね、更には自分自身の無能さと恥知らずを証明したのだと理解認識しろ。

本来貴族とは他人からの抽象や罵声等は毅然とした態度で受け流す

ものだ。

それが貴族社会での守るべき最低限の作法であり、最低限のルールだ。

本来、貴族とゆう者は自身が他人から憎まれている事に誇りを感じるのはなく。

憎まれ、恨まれる事に自己嫌悪をして、自分自身が不当に支配している事を理解して認識しろ。

その上で我々貴族は国を導くのと引き換えに国と国民から報酬として利益を頂く。ただ其だけだ。

だが、今このタイタニア学園に居る貴族やエリートと呼ばれる者の大多数はその程度のことさえも、わからないものが多すぎる。

そして、その極みが今のこのタイタニアの現状だ！！」

ランは長々と話続けて居たが流石に少し疲れたのか、途中で一旦ポケットから水分補給の為にスポーツドリンクの入ったペットボトルを取り出し口にする。

そして直ぐ様罵声を浴びせられる前に演説を開始する。

「先程も言った通り、貴族等何一つ優れた存在等ではなく。

ただ単に立場と経済的理由から例え無才能でも国を動かす事ができるただ其だけの存在なんだ。

だが、お前達はどうか其を勘違いして、自分達は誰よりも優れていて。それ以外の者は単なる虫けらで自分達の為の単なる踏み台か又は自分達の欲求を満たす為のただの食い物と、しか考えていない。そしてその考えは生徒だけではなく。その生徒の両親とあろう事かこの学園の教師達まで同様の思考を持ち始めた。

そしてその、愚か者達は自分達のエサを集め確保する為にこの学園の入学に必要な偏差値を大幅に下げ、更には学費も破格とゆうまでに値段を下げる。

通常では有り得ないような条件で一般の生徒達を呼び集め、その裏では其をエサに今度は貴族達やエリートと呼ばれ優遇される者達から、多額の学費で入学、又は編入させて。破格の条件で集めた生徒達を殴り者にさせる。

恐らく生徒達の契約書には自主的な事情で退学届けをした場合。多額の賠償金が発生するように仕掛けられて有るんだろう。

だが、それは当然ながら不当な支配であり、彼らが食い物にされて言い訳がない。

だが、彼らは貴族達とこのタイタニア、果ては自分の家族からも傷みと苦悩とプレッシャーを与えられて、自己嫌悪に陥り自身に罪があると錯覚してしまう。

又は自分自身で自身の命を粗末にして失ってしまう。……別に私は聖堂を行う正義の人やいわゆる正義の味方等ではない。

ただ見るに耐えないだけだ。

正統な権利を持つ者が権利を持たない、者達に不当に弾圧され蹂躪され。その結果自分自身が何の才能も権利を持たない無能な存在なのだ。錯覚して自分自身を陥れてしまう。

私は、いや俺は其がただ許せない、ただ見るに耐えないだけだ!! もう一度言う、貴族とは婚前と他人から大切な者を奪い、人を踏みつける。ただの社会に認められているだけの山賊に過ぎないのだと!!

最後に明言しておこう、俺はそんなお前達の蛮行を根絶する為にここに来た。

余計なお世話かも知れないが、覚悟しておいて貰おうか」

この言葉の後すぐに司会が演説を止めて、入学式を強制的に終了される。

「そ、それでは皆様この辺りで入学式を終了に致します。皆様は速やかに退館してください」

この時、明日香と絢音は体と心が言い表せない紅葉感に満たされていた。

「間違いないわ、明日香。彼は私達の力になってくれるわ♪」

「え、あ、そ、そうね」

「どうしたのよ、明日香。ポケットとして？」

「何でもないわ。其より絢音、彼を」

明日香はこの時、絢音以上の紅葉感で頭の中はランの言ったタイタニア根絶による。この先の生徒達の事で溢れていた。

「わかってるわ。彼が他に捕まらない内に勧誘しないと。……急ぐわよ明日香!!」

こうして明日香と絢音は
退館したランを追って、人人混み掻き分けて追いかけて行った。

第4話 結果（後書き）

第5話 決闘^{デュエル}

お楽しみに

第5話 決闘（デュエル）（前書き）

皆さん、長い間更新をストップしてしまって申し訳ありませんでした。

これからはまた定期的に更新させて頂く予定です。

ご迷惑をお掛けして誠に申し訳ありませんでした。

第5話 決闘（デュエル）

演説を終えて一学年の校舎に向かって人混みの中、廊下を歩いていったランは途中で親友であり同じタイタニア学園に入学した、【一之瀬土門】と合流して先程の演説について話していた。（ちなみに、一之瀬土門はランや玲奈と同様に貴族でありランや玲奈とは幼少の頃からの付き合いである）

「それにしても随分と派手な演説をしたもんだな。

たしかに、お前の言う通りだが。

其を貴族として有名なお前が言うのもお門違いの気もしないではないが」

一之瀬の言葉にランは悪びれもしないで茶化した態度と口調で返事を返す。

「別に偶々養子として引き取られた家が貴族であってして。俺自身にゆうし以来の喫水の貴族とゆう訳ではないからな。

それになにも俺は貴族全てを否定し侮辱した訳ではないからな。

ただ単に無能な上に不当な態度で他人から奪う屋からが嫌いで見る

に耐えなかったただけだ。

それと、これは俺自身の主権なんだが。同じ奪い、恨まれるなら自分自身の労働の結果でそう有りたいと思うのだが」

ランの言った自分自身の労働の結果で全てを得たい、とは詰まり。貴族だけのことではなく。少なくとも人間が生きる為に最も重要で最も大事な姿勢であり、どんな結果でさえ。自分の行動とノウハウで出した結果で生きていたいと言う事である。

例えその行動で自身の生命や財産を失うとしても、全てが自分自身で導き出した正統な結果であり、正統な権利で有ってして。それらを認めて生きて行くのが全ての人間の正統な権利と資格で有るからして。

それらを都合に応じて他人の姓にしてはいけないとランは信念として考えて居る。

だからランは今まで何の資格も無しにただ単に血筋が繋がっていると言う理由で一族の財産を我が物顔で受け継ぐ貴族に対して強烈な劣等感を抱いており、決して自分は何の資格も努力もノウハウ無しに血の繋がりで一族のから何かを得たりはしないと自身の信念とプライドに固く誓い、その為の技術の向上に日々情熱と努力を費やしている。だからこそランには玲奈や一之瀬の様に血統や財産等の下らない概念にとらわれない友人が数多く彼の元に寄り添っているのだ。

そんなランのデュエルは常に戦術的で相手の力や罠を常にそれ以上の戦術で打ち破る事柄。ランは傭兵家と言う異名で呼ばれている。

「だが、それは悪までもお前の主権の行きを出ないだろ？」

全ての人間がお前と同じ主権で物事を考えて生きてる訳じゃないかな。

何よりそんなことはお前自身、誰よりもわかっているだろ。

主権が違えば概念が違う、概念が違えば信念が違う、信念が違えば当然価値観も違う。

だから、どんなに理想的で素晴らしい事を言っても、例え其を行動に移しても。他人が10人居れば10人全てに貶され間違いとされる事も歴史的にそう珍しい事じゃない。

しかもこれは他人の数が増えれば増えるほどに。その全ての人間に否定される事が当たり前になってくるのも歴史を見れば明らかだろ」

一之瀬の常識的な意見にランは何の後悔の色を見せずに又もや茶化した態度で返事を返す。

だが、態度はいい加減に見えるがその目からは言い表せない説得感と自信が見える様な気がする程に移る。

「ああ、確かにその通りかも知れないな。ただ悪までもそれは否定したその人間達が否定に成功しただけで今の、そうだな少なくともこの学園の貴族やエリート達が俺を否定出来るとは限らない。

何より、古代より他人の成功を見て自分もできると思うのは愚か者の証しと言われているからな。

そのことはお前のいう歴史的検知からしても極めて比率の高い事実だと俺は思うのだが。

まあ、この学園の無能達が自分自身の手で其を証明したいと言うなら。俺は甘んじてその行為の加速を手伝ってやるだけだな」

一之瀬は今のランの普通の人間ではほぼ絶対に答えないであろう答えに驚きを通り越して、その口先から大量の笑い声を漏らしてしまう。

「ツハツハツハツハツハ！！ いや失礼。でも、普通こう言う質問をされたら大体は否定された者よりも努力を積み重ねて認めさせるとか、最初から否定される事なんか考えないで自分は必ず受かる、公定されると言うのが当たり前なんだが。

……っなのにお前は昔から独創的とゆうか何とゆうか、そうだな一言で言うとお普通じゃないよ。もちろん言い意味でな！！

……っごめん、でも笑いが、っハツハツハツハツハツハ」

一之瀬の誉めては居るが馬鹿にしても居る態度に納得が行っていないランは、不満そうな表情を浮かべるとその不満を言葉にして聞かせる。

「ふっ、その態度から見るとまるで俺を珍獣として誉めている様だな。

一体お前はいつからそんな楽しみを身に付けたんだ一之瀬？」

「いや、別にそうゆう訳じゃないんだが。
そうだな何かうまい例え方はないかラン？」

一之瀬も一之瀬で普通は聞かない様なことを平然と聞ける辺りを見ると彼もまた普通出はないだろう。
詰まりこの二人は翌々は似た者同士である訳である。

「そうだな……そうだ。こうゆうのはどうだ。
詰まり、素晴らしい程のまばゆい光を放ってはいるがその光の色は他に類を見ない程の、禍々しさも含んでいる。
お前が言いたいのはこうゆう事か？」

「そうそう、それだ！！ 確かにお前は他人とは明らかに違う発想力がある。
だが、それは同時に余りにも人と違いすぎる為に常に異端とされ、異常とされる。
又はその独創的な理論を自分の優越感を満たす為の道具として扱われるかだ」

一之瀬は面白半分の態度で淡々とそう言い放つと。
ランはその態度に少しでは有るが、気分を害した様子で。しかめっ面で皮肉を返す。

「で、お前は今俺を相手に其を実行して甘美な興奮を味わって居るわけだな」

「ああ、そうだ」

一之瀬は悪びれもしないで少し口元をニヤニヤと緩ませながら、そう返事を返した。

「それじゃっぱり、お前は俺を珍獣扱いしてるんじゃないか？」

「まあな」

「お前!!」

この一之瀬の一言にランは赤面を受ける。

同時にランは一之瀬に対して機嫌の悪い態度を見せる。
その態度を見るなり、一之瀬は直ぐ様に笑顔を見せて、ランに軽い謝罪を取る。

「わるい、わるい。ホンの冗談だ。許せよ、ラン」

「ふう、土門、お前も武門の男だ謝罪の態度の取り方一つでその力量が問われる事は百も承知の筈だ。
なら、其を形にして実行して貰えるかな？」

ランの言う謝罪とは恐らくは、土下座等に類する行為を意味していると思われる。

「確かに、そうだな。
でも、それはお前も同じ筈だろ？」

「ああ、俺もお前同様、武門の一族の人間だ。
それで？ お前が何を言いたいか大体は分かるが。明言して貰える
と助かるな」

「ああ、詰まりな、俺が言いたいのは。この程度の悪ふざけを感受できないのは器量が小さいんじゃないのか？ さっきお前は謝罪が力量を表すと言ったが、それは許す側も同じだろ？

『お前も武門の男ならこう言う時の対処の仕方の一つで己の力量が計られるのは百も承知の筈だろ？』 ちがうか？」

「ハア、全く、お前には敵わないよ。たく、余り認めたくはないがな」

「まあ、お前に口喧嘩で勝てるのは世界で唯一俺だけだからな。

とつま、冗談はこの位にして、本当に大丈夫なのかラン？ さっきの演説を受けてこの学園の大多数の貴族、エリート生徒達はこの後お前を目の敵にして来るだろう。

それにお前だけじゃなく、お前の婚約者のレナちゃんまでもその対象になる可能性も有るだろう？

それでなくともお前は養子だからと言う理由で一族から孤立して居るって言うのに一体どうする気なんだ、ラン？」

先程までの茶化した態度とは裏腹に一之瀬はこの後の学園でのランとその婚約者の玲奈の立場に対して、真面目な態度と真剣さを持つて、ランにこの先の考えを問い質す。

一之瀬はこの回答のいかに関わらず、ランに全面的に協力する積もりでいる。例え其が一族とこの学園での自分自身の立場を危うく

するとしても、一之瀬はランと共に戦う積もりでいた。その事をランも察している。その上でランは徐に話始める。

「別に明確な勝算がないわけじゃないんだ。

確かにこの勝算を形にするには、いくつかの手順を成立させる必要が有る。

だが、どうやら勝利の女神は俺達の味方らしい。

後ろを見てみるよ、土門」

そう言われて、徐に一之瀬は後ろを振り向くとそこには、明日香と絢音の姿が合った。

「後ろの二人の女教師はここに入学する前に、目に通した教員リストで見たことが有る。

確か金髪のロングヘアの巨乳が天上院明日香でもう一人の赤毛の八方美人が芹沢絢音だった筈だ。

調べによると彼女達はこのタイタニア学園でレジスタンス活動をしている、教員グループの中心的な教師で二人ともかなり優秀でその上、常に学園の利益よりも生徒の為の教育を優先する、素晴らしい教員らしい。ただ、言う間でもなく一般の生徒達を家畜として、高級生徒達に与えている。

タイタニアでその様な教育態度や姿勢を取っているが為に。どうやら彼女達は苦しい立場に居るようだ。

しかも残念な事に彼女達には後ろ楯もなければ、守っている筈の生徒達やその両親達からも非難と罵声を受けている状況だ。だから」

ランが言い終わる前に一之瀬が話に割り込む。

「だから、お前が彼女達の後ろ楯になって、支援と援助を抵抗グループに与えて其を糸口にしてタイタニアへの抵抗活動を激化させて、その成果を持ってしてタイタニアを内部から分断する。まさか、本当にそんな考えでタイタニアに戦いを挑んで勝算が有るつもりか？」

一之瀬の言う事はもつともで合ってして、ランの戦略がそのとおりで有るならば無謀としか言いようがない。だが、ランは不敵に笑みを浮かべる。

「フフッ、土門。俺がそんな他力本願な計略を本気で勝算と考える様な浅はかな男だと思うか？」

「っ？」

その言葉に一之瀬は思わず苦悶の表情を浮かべてしまう。そして話の主導権を取り戻したランはそのまま話を進める。

「土門、このタイタニアで会長職にあるルドルフ以外での、一番の権力者は誰だと思う？」

「そんなの決まってるだろ、校長だ」

「その通り。ならその次は誰だ？」

「それも決まってるだろ、教頭だ」

「お見事、それも正解だ。……どうやら、わからない様子だな土門。鍵になるのはこの学園の伝統的経営システムだ」

「伝統的経営システム？」

「……っそうか！！」

た、確かに。その方法なら前半は局地戦にはなるが其を乗り切れば、十分タイタニアに対抗できるな。

流石だな」

「だろ？ この方法ならいくら敵地とは言え付け入る隙は十分にある。

だが、最初に言った通り、其を完成形にするには数々の難題をクリアする必要がある。

まずは、後ろの二人の美女お二人とこの学園の全ての生徒と教師に、俺自身の実力を知らしめる必要がある。

誰か其なりに名声と実力のある奴を探してデュエルで潰さないとな」

ランがそう言っていると目の前から、数人の男子生徒に絡まれて抵抗している女子生徒の悲鳴が校舎に響き渡る。

「キャヤーー！。

や、やめてください。

はなして」

「はっん、うるせーな。

大人しくしろよ。ぶっ殺すぞ！！」

「おい、女。あんまり安岡さんを怒らせるなよ。

どうせ、誰もお前を助ける奴は居ないんだ。

お前らグズな貧乏人は誰も俺達には逆らえないんだ。それに逆らえば、お前らがただじゃすまないからな。なんたって、この学園にはお前らの味方は一人も居ないんだからな。

このタイタニアじゃあ生徒も教師もお前らの敵なんだよ!!」

「そ、そんな」

「それにしても安岡さん何でこの女が欲しいんですか？ 確かに胸がデカくて顔もかなり良いですが。」

その俺達の目的は須藤って奴じゃなかったんですか？」

「あん、うるせいよ」

「や、やめて、だ、誰か、誰か助けてー」

「だから、うるせーって言ってるだろうが!!」

安岡は少女に手を上げた。だが、

「なに！？ て、てめえは！！」

「ハア、全く本当にここの生徒はバカ揃いだな。
よっぽど家族と教師の教育が悪いと見える」

ランは安岡の拳が少女に直撃する直前に安岡の拳を受け止めて弾き返した。

「な、なんだと。この安岡グループ時期総帥の俺に向かって、ふざけたことぬかしやがって。
てめえーぶっ殺すぞ！！」

「ほう、その態度と知能力で時期総帥になれるとは。どうやら、お前の父親も相当な無能らしいな」

「てめえ、てめえー！！
もう一度言ってみろ、そんなときはてめえー命はないと思え」

「ハア、ご心配なく。俺は諸君ら厚顔無恥のやからと違って、そう何度も同じ発言はしない。出来が誓うからな」

「てめえー!!」

「お前はそれしか言葉を使えないのか？」

まあ良い。だが、これ以上は他力本願で無益な恥を上塗りするな。

先祖の有名が泣くぞ？」

この時、ランは想像もして居なかった。この時、助けた少女が自分と明日香。

そしてこのタイタニア学園の運命を大きく狂わせるとは。

第5話 決闘（デュエル）（後書き）

次回第6話 速攻のファイブリバーズ
お楽しみに

第6話 速攻のファイブリース（前書き）

皆様いつもお読み頂き誠に有り難うございます。

もし宜しければ皆様からのリクエストやメッセージをお待ちしておりますので、どうか宜しくお願い致します。

あと、出来ましたらこの作品の欠点等が有りましたらご指摘をお願い致します。

第6話 速攻のファイブリース

ランを追って、1年の校舎の廊下を明日香と綾音は共に人混みを避けながら進んでいた。

「遅いわよっ、明日香。グズグズしてると彼を見失うわ。」

なんとしても今日中に彼にコンタクトを撮って、私たちに協力して貰わないと。アンタの解雇処分の件もあるし急がないとっ。

……ねえ、ちょっと明日香聞ってるの？」

「え、……ええ、聞ってるわ」

先ほどのランの演説以降。明日香の様子は何処と無くおかしく、先ほどからずっと上の空でいる。

「どうしたのよ、明日香。さっきからボーッとして。あっ、まさか彼に一目惚れでもした？」

「ち、違うわよっ。もう、もう変なこと言わないでよっ。

そ、そんなじゃないわよ。だ、大体彼はまだ16歳の学生よ。それに教師が生徒を恋愛の対象として見るのは教師として失格の行為だわ。

悪いけど、私はそんなくだらないことに興味はないし、今私の頭に有るのはこの学園で苦しんでる生徒達をこの学園の教師として助けてあげたい。ただそれだけよ」

明日香は顔を赤く染めながら、少し息を荒立てて綾音に否定した。だが、その姿は何処と無く可愛く。傍目からはまるで恋する少女がその事実を友達に冷やかされて、必死にごまかしている姿に見える。

「そう、でもさっきからアンタの彼を見る目、普通じゃないよ?」

「ちが、それは、ただ……」

「ただ、なに?」

「え、いや、その、な、なんでもないわ……。

（ただ、彼はなんとなくだけどアイツに、……十代に、十代に似ている様な気がする。ただ、それだけ。

……外見や考え方や言葉使いは全然違うけど。でも、どこか彼は十代に似ているわ。

少なくとも私にはそう思えて仕方ない。

……ば、馬鹿馬鹿しい十代に似ているからってなんなのよ。

大体なんで私はそんなことを気にしているの？

まさか、綾音の言う通り彼に恋でもしたって言うの？

……ハア、（私は一体なにを考えているのよ。それこそ馬鹿馬鹿し事だわ。

大体、彼は十代じゃないし、例えば十代本人に対しても恋愛感情を抱くのは馬鹿な事だわ。

だって、私の恋はもうすでに終わっているんだから。……勇気が出せなかったあの時に……）」

明日香がそう自分の中でぐだぐだと考えていると隣に居る綾音が突然と立ち止まり、明日香に声をかける。

「明日香アレを見て」

「え、なに？」

綾音の言葉に従い目の前を確認する明日香。

そこには安岡が数人の子分と共に少女を一人間に挟んで、明日香達の目的の人物である、須藤蘭とただならぬ様子で言い争って居る姿が合った。

「た、大変だわ。きっと安岡京介達があの新入生の女子生徒を、暴行していたんだわ。」

それで彼が。と、止めないと。行くわよ綾音。……綾音？」

明日香の教師として当然の仲裁に入ると言う言葉に綾音は、何故かその場に立ち尽くして動く様子がない。本来ならこの様な状況では、綾音は明日香よりも過敏に反応して真っ先に仲裁行為を実行していた筈で合った。

実際、今回も明日香よりも早くこの状況に気づいたのも彼女の方だった。

なら何故。彼女は動かないのか？

「待って、明日香。ここは様子を見ましょう」

「え、なに言ってるのよ綾音。あなたらしくもない」

「考えても見て、彼がいくらこの学園の有り様を否定したと言って

も。彼がこの学園の生徒や私達の力や助けになって暮れるとは限らない。

ただの遊び半分の酔狂かも知れないわ。

それに例え真剣にこの学園の為に戦って暮れるとしても彼が私達が求めているだけの力が有るとは限らないわ。だから、ここで彼の力と真意を試すわ。

仲裁に入るのはそれからでも決して遅くはないわ。違う？」

明日香は綾音のこの問いかけに少し悩んだ様子で頷いた。

「わ、わかったわ。けど危険だと思ったらすぐに止めに入るわよ。いいわね、綾音」

「ええ、いいわ。ありがとう。明日香」

この明日香と綾音のやり取りの間にも蘭と安岡は自分達の話を進めていた。

「て、てめえ。ほざいてんじゃねーぞ！！」

弱い犬ほどよくほざくんだよ。この口だけの犬野郎!!」

「同感だな。自らを強き者と考えるものは他力本願で暴虐な態度をとり、必要に声を荒立てて、不要なまでに口数を増やし。更には常に相手を見下し、相手の全ての雄弁と理論を何の構想も自称もなしに否定し。その姿勢を強者として自らとする。

吠える犬が弱いかはともかくにしてな。

だが、その点、お前はかぶんにして自身を弁えている。

何しろ誰に言われるもなく自分自身で自らを吠え立てる弱き犬の身分だと公言したんだからな。

ご立派。流石は心底弱きに浸っているいわゆる、負け犬の王様は格が違う。

何しろ恥を恥とも思わず、更には其を立派や高貴と考えられるのだから。

我々しもじもの者とやはり出来が違いますね。

『負け犬のお・う・さ・ま』」

ランは当然、安岡が自分を指して負け犬と言っていることはわかっている。

だからこそ其を比類返された安岡が尋常で入れる筈がないと考えていた。

しかも今ここにはランや一之瀬を始め、数多くの貴族又はエリート
の生徒が集中している。

そんな中で自らを公然と否定され、更には恥まで搔かされたと合っては。安岡自身の名誉とプライドは地に落ち、更には一族の誇りとプライドおも同時に地に落とされたと合っては。

安岡の冷静な部分のアイデンティティーは完全に崩壊し最早、漠然と押し寄せてくる怒りの感情に身を任せて、ただ怒り狂い暴れるだけの精彩を欠いた哀れな操り人形に出来るのだとランは考えてこの作を安岡に仕掛けたのである。

そして、それは見事と言うより、寧ろ必然と呼べるかの様に成功を見る。

「っは、ハッハハハハハ！！ 見ろよアイツ、情けねえーな。まさに負け犬だぜ！！ っはハハハハ」

「オイ、負け犬、どうした、もう吠えないのか？
オイ、どうした負け犬の王様、泣いてるのか？ 泣いてんだろ！！
ってか泣け、投げよ。負け犬」

「ちょっと、やめなさいよ。いくらホントのことだからって、本人いや、負け犬君に失礼よ。

いくら負け犬君だからって、いっちょ前に悔しがるんだから。それで自殺でもしたら可哀想よ。

まっあ、死んじゃった方角ぶっちゃけ面白いけど。

とっゆうより私の目の前で屋上から飛んで死んでくんないかな？」

「ちょっと、あんたが一番酷いわよ」

「別にいいじゃん、別に負け犬だし。生きてるだけ負けだし。てゆうか生きてんのなんかキモくない？」

「うん、キモいキモい。」

あんな負け犬早く死ねって思うよ。ってかはよ、死ね死ね死ねえー
ー！！！」

「負け犬、負け犬、負け犬」

「クツクツクツク」

「死ね死ね死ね。キモいキモい」

「負け、負け、負け犬。」

泣け泣け、負け犬負け犬、ま・け・い・ぬー！！！」

「泣け泣け泣け。死ね死ね死ね死ね。負け犬！！！」

元々、この学園に通っている貴族やエリート達は安岡同様に人間として未発達であり、人間として大事な部分が欠落した者が大多数である。

だが、このような光景はこの学園だけでなく寧ろ一般的な学校でも日常茶飯事であり当たり前の光景と呼べる。だが、そんな彼らの中にもまともな人間が居ない訳ではない。

「ひ、酷い。酷すぎるます。同じ人間なのに」

そう言ったのは。安岡に捕まり暴行を受けていた少女だった。

その少女は先ほども安岡に捕まり危うく肉体的暴行をされようとしたにも関わらず。その目には涙を浮かべており、はた目から見ても心から安岡を同情していることが見て取れる。

だが、当の安岡本人はその少女一人の博愛心よりも目の前に映る数多くの同友達の抽象とその原因となったランに対する殺意にも似た込み上げてくる怒りで我を見失い、その感情に飲まれるがままにランに対して暴力を翳そうとする。

だが、

「うぐうううう。て、てめえええー！！　ぶっ殺してやるぜっ

「――!!」

ランは安岡が手を上げる前に安岡の目の前に手を翳して安岡の動きを止めさせた。

「待て、恥を受け精彩を欠いているのは分かるが。

お前が貴族である以上多くの貴族の目のある中で同格以上の貴族に対して公然と死闘に及ぶと有れば後日受ける非難と抽象は今の火ではないぞ。

更には俺に不当な理由で死闘に及んだとなれば俺以上に俺の一族が黙ってはいまい。

そうなればお前自身も含めて安岡グループの真意は失なわれ、良くすれば孤立し。悪くすれば株買収の末に吸収合併と言うことも皆無ではないぞ。

だが、精彩を失っている今のお前にそんな理屈も理論も通用しないだろう。

どうやらお前は俺に死かそれに類似する屈辱を与えないと気がすまないらしいな。

そこで俺から一つお前に提案がある。有る物を賭けて、俺とデュエルをしないか。

恐らくはこの条件でお前も納得する筈だ。何大したことじゃない。

ただ、俺とお前の家督の相続権を賭けの制限かに置くだけだ。これならお前も文句は無いだろ？」

詰まり、敗北した側は自分の一族の相続権を正当な互いの意思で相手に譲渡した物とする。

当然そうなれば負けた側は一族を破門にされてしまい。あげくの果てには勝った側に正当な敬意で相続権が渡ってしまふのだから、その一族の相続者は勝った側の当主となる。

だが、ここで一つランと一之瀬以外は知らない重大な問題がある。それは安岡が正当な安岡グループの後継者で有るのに対してランは未だ家督の相続権を一族の兄弟達と争っている状態で合ってして、今のランには須藤グループの家督の相続権を賭けるどころか正式な相続者を語る資格さえ無い。

詰まり、ランは安岡がこの条件に従いデュエルして、万が一にも自分が敗北したとしてもこの事を理由に賭けの内容を不当として破棄する積もりでいる。

一方の安岡はランの突然の申し出に速答はしなかったものの少し間をあけてから答えた。

「へ、へへへへ。良いぜ、そのデュエルのってやるぜ！！（クッククック、まさか自分から死にに来るなんてバカがお前見たいな口だけ野郎がこの俺に勝てる訳がねえー）
だが、言つとくが二言はねえーだろうな？」

「ああ、勿論だ。だが、契約は確りとしておこうお互いにな。その為にお前と俺とでこの契約書にサインする。

立会人には一之瀬グループの時期当主の彼、一之瀬土門になって貰う。

それでいいかな？」

「ああ、かまわねえーよ。いいから早くはじめるや」

「そうだな、それじゃ、ご足労だが
まずはサインから始めようか」

そう言うところと安岡は一之瀬を間に挟み互いにランの用意していた貴族の使う契約書に契約内容とその了承を記入していく。

「よし、契約書の準備は整った。
あとは戦い、どちらかが敗者になるだけだな」

「ああ、お前がな!!」

「では、始めるとしたいが。あいにくと今、デュエルディスクの持ち合わせがなくてね。

……一之瀬持っていないか？」

「いや、悪い俺も持ち合わせてない。
すまないな」

「そうか、いや、すまなかった」

ランのやり取りの間、対戦者の安岡は子分の持っていたデュエルディスクを受け取り、自らの左腕に取り付けると直ぐ様に準備の終わって居ないランに対して罵声を浴びせようとするが、その様子を見ていた安岡に捕まっていた少女が自分のカバンからデュエルディスクを取り出しデッキを抜いてからランにそのディスクを手渡す。

「あとう、良ければこれ使ってください」

「これはすまない、助かる。えっと」

「水奈です、雨水水奈です」

「あ、これはご丁寧に、須藤蘭です。
本当に助かります、ミス水奈」

「は、はいっ（か、カッコイイ）」

「オイ、てめえ、いつまで待たせんだ!!」

「これは、失礼。では始めようか」

こうして互いにディスクにデッキをセットして互いにディスクを構築する。
そして

デュエル。

「すまないが先手を頂く。ドロー、カードセット。」

エンドターン」

「な、なんだと」

驚くことにランはドローカードを確認しないで初期の手札全てをマジックトラップゾーンにセットしてエンド宣言をする。

この驚く程に早くなおかつドローカードの確認無しの五枚伏せに周囲のギャラリーは勿論、対戦者の安岡も驚きを見せていた。

「て、てめえ。なめてんのか!？」

「フン、そうかお前にはそう見えるのか。

やはりお前はその程度。

俺には遠く及びそうに無いな」

「な、なにわけわかんねえことってんだ!！」

「フン、コタクは良いから早く初めて貰おうか」

「く、クソが。俺のターンドロー!!」

「フン、青二才に傭兵のなん足るかを教えるとするか」

こうしてランと安岡のデュエルはランの神速のカードセットを始めにして、切って落とされた。

第6話 速攻のファイブリース（後書き）

次回第7話 流星スターシンクロ
お楽しみに

第7話 流星スターシンクロ（前書き）

皆様長い間更新をストップしてしまい本当に申し訳ありません。

読者の皆様には大変ご迷惑をかけたました事、誠に申し訳ありません。

これからはできる限り週一での更新を目指して書かせていた抱きますので。

読者の皆様には温かい心でお許し頂ければ幸いです。あと、もしよろしいければ皆様からのご意見ご感想やリクエスト等を頂けましたら、このうえない励みと喜びになりますので、宜しければ宜しくお願いいたします。

それでは本編をどうぞ。

第7話 流星スターシンクロ

ランの仕掛けた計略に乗せられた形で安岡とランのデュエルは開始される。

それに伴いランの先攻でターンは始まり、ランはそのターンを僅か五秒でそれもドロートしたカードを確認もせずに初期の手札のみ、それら五枚全てをマジックトラップゾーンに伏せると言う驚くべきプレイタクティクスでターンを終了する。ちなみに、デュエルモンスターズのルールによって互いのプレイヤーはデュエルで使うデッキ構築の際に規定として40枚以上、60枚以下でデッキを構築しなければならない。

更にはその際にカードのテキスト上の同名称のカードは規定として3枚間での導入が許可去れている。

しかし、カードの中にはその余りにも強い、性能上それ一枚が絶大な力でデュエルを支配してしまいデュエルそのモノのゲームバランスを著しく低下させてしまう為の開発メーカーから、その使用を禁止された、禁止カードが存在する。

これ等に指定されたカードはその名の通り、一切の使用を禁止去れている。

そして、中には禁止と間では行かないが、その使用に制限を与えられた制限カードも存在する。

これ等のカードの使用の際はその制限カードの制限レベルの名称と同数の数間でしか、デッキへの導入が許可去れていない。

詰まり一枚制限に指定されているカードは1枚まで、二枚制限に指定されているカードは2枚間でのデッキへの導入と使用が各プレイヤーに許可去れている。

デュエルを行う全てのプレイヤーはこのルールに伴い常にルールの範疇で最も最適なデッキ構築とプレイ方式を導き出して、それ等を実戦や研究を繰り返して最も最適なデッキへと調整し、進化させて行く。

これがデュエルを行うデュエリストの主な目的で有る。

そしてデュエルには対戦上の勝敗を決定する為にライフポイントのシステムを採用している。

詰まり、互いのプレイヤーはゲーム開始時に設定された数値のポイントを取らん方式のルールで互いに互いのポイントを自分のカードを使い奪い合って行くわけだ。

このデュエルに設定去れているライフの数値は4000ポイント。すなわちこれを先に0以下の数値に落とされた者がこのデュエルの敗者となる。そして、ランがこのターンを終えた為、その対戦者である安岡にターンが移行する。

「ちっ、なめやがって。そんな今時代遅れなトラップ除去ロックなんかで、この俺のスターシンクロを止められると思うなよ。いくぜ！！ ドロー！！」

ランはこの時、安岡が挑発の際に口にした言葉から安岡のデッキの構築内容とそこから導き出されるであろう戦術をこれまでの安岡の言動と今の発言から導き出そうとしていた。

「（確か奴は先の演説の際に、自分のデッキをスターシンクロと公

言していた。

同様につい先刻も奴はスターシンクロと宣言していた。

だとすれば、奴のデッキ構築の既存のコンセプトはやはり、スターシンクロと言うことになる。

ならばまず、スターシンクロの意味する戦略目的と戦術目的を正確に予測しなければな。

確かシンクロとは新たにデザイン去れている、新ルールレギュレーションシステムの筈だ。確か正式名称はシンクロ召喚システムだった筈だ。

だが、シンクロシステムは依然として開発段階であり、未だ正式発表さえ去れて居ない。

だとすれば、考えられるのは二つ。一つは奴の口に行っているのが俺の考えている新システムの物とは別のシンクロと記号去れている戦術又はカードシステム。

二つ目は奴が何等かの手段を使い、新システムのシンクロ召喚を使うカードの入手に成功したことが考えられるが。

恐らくは後者だろう。俺自身もそうだが、どうやら貴族等の高貴な身分にいる者には開発メーカーのペガサス側から優先的に情報などを受けることができるらしいな。当然それらを与えられるのはペガサスに何等かの形で繋がりが有る者に限られるが。

恐らく安岡グループは少なからず、ペガサスに資金提供をしているのだろう。その見返りとして息子である安岡京介にペガサスは試作段階のシンクロ召喚システムを搭載した、スターシンクロと名付けられたカードシリーズを渡したのだろう。

或いはそれを強要されたか」

ランは安岡が未だ見ぬ最新技術のカードを所持していることに気づくと、緊張感漂う表情で鋭い眼瞳を安岡に向けると、そのまま安岡

のデュエルディスクと手札を見詰め。
再び安岡に対抗する為の立案に勤しむ。

「（いずれにしろ、奴のデッキが新システムであるシンクロ召喚を
主軸とするデッキであることは自明だ。

だとすれば必然的に戦略レベル、戦術レベルともに従来とは全く異
なった展開を見せることは必定。

必然的に俺の苦戦が必死になる。

……ならば、取るべき道は一つ。奴のデッキが従来の常識の枠組み
の範疇外で有るなら、奴の個々の戦術に対応せずに奴のプレイタク
ティクスから奴のデッキプレイングの基盤となるカード又はプレイ
ングを的確に判断して確実に看破していく。

それが今回最も効率的な最良の作。

確か『シンクロ召喚とは自分フィールドのモンスターのレベルと新
たに追加されたチューナーモンスターのレベルを自分エクストラデ
ッキのシンクロモンスターのモンスターレベルと同数になるように
それらのモンスターを墓地に送り、自分エクストラデッキから墓地
に送ったモンスターの合計レベルと同数のシンクロモンスターを選
択して特殊召喚する、と言うものだったな。』

それだけ聞けば一見ユニオンモンスターの融合召喚と指して変わら
ないようにも思えるが、恐らくは汎用性が段違いなのだろう。

恐らくその異常なまでの汎用性が仇となり、ゲームメイキングの調
整に手間取って居るために実用化までに及んで居ないのが現状なの
だろ。

だが、ペガサス程の男が現状でそのような圧倒的アドバンテージを
与えるカードを、無条件で作り、与えるとは考えにくい。

主権だが、彼はカードに純粋な力だけを求めて居るようには思えな
い。寧ろ彼はカードに純粋な力よりも純粋な愛を求めているように

俺には思える。

彼の人となり俺の構想の範疇なら、彼が安岡に与えたカードにはそのアドバンテージに比例するだけの設計上のデスアドバンテージが必ず存在する筈だ。

なら、その辺りに活路が開ける筈だ。それにはまず、奴のデッキの動きのシナジーを理解する為に奴のプレイングを洞察する必要がある」

ランの思惑とは関係無く安岡は自分自身から溢れ出す、ランえの暴力的な感情をまるで野獣になったかの如く受け止め、動物的本能を剥き出しにランに襲い掛かる。

「（俺の目の付け所が確かなら奴のスターシンクロの意味するスターとは流れ落ちる流星又は、天に輝く星座を意味している筈だ。

シンクロモンスターと言う特性を考えれば恐らく、ギミックの基盤となるカードは流星の意味する通り、流れ落ちる星をイメージさせる程のモンスターの展開力を有していると見ていい）」

「いくぜ、覚悟しろよ。この口だけ野郎っ！！俺は流星のスターペガサスを攻撃表示で召喚っ！！」

安岡は自身の左手に持っていた手札から一枚を、右腕で多少乱暴にしてデュエルディスクのプレートにセットするとディスクがその力

ードのデータを瞬時に読み取り、ソリットビジョン化させる。
それにより上空から突如、青い光を放つ流星のような星が安岡の目の前へと飛来し、落下箇所から全身を無数の蒼く美しい光を放つ星で飾り付けられた蒼白い天馬が地に足を着き、主である安岡の敵対者であるランに対しその蒼く美しい瞳で睨み付け威圧する。

【流星のスターペガサス レベル4 光属性 獣族 効果攻撃力1700 守備力1200 オリジナル】

『このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキを上から5枚めくりその中の流星のと名のつくモンスターを全て墓地に送り、残りのカードを好きな順番でデッキの上に戻す。その後墓地に送ったレベル4以下の流星のと名のつくモンスター1体を選択して手札加える。』

手札からレベル1の流星のと名のつくモンスター1体を特殊召喚する事ができる。この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃する事ができない。この効果は1ターンに1度しか使用できない。』

「クックック、ワッハッハッハッハ！！ 俺のこの手札は最高、最強っ！！ もうお前に勝ち目なんかないんだよっ。いくぜっ、流星のスターペガサス効果発動っ！！ このカードは召喚成功した時っ、

デッキを5枚めくってその中の流星のと名のつくモンスター全てを墓地に送り、残りをデッキに戻しそのあと墓地に送った流星のと名のつくレベル4以下のモンスター1体を手札に加えるっ。ヒッハッハッハッハッハッ！俺は墓地に送った流星のスターソルジャーを手札に加えるっ。そして、効果発動だっぜ」

【流星のスターソルジャーレベル3 光属性 戦士族

効果 攻撃力1400 守備力1000 オリジナル】

『このカードは流星のと名のつくモンスターの効果で手札に加わった時、特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊された時、デッキから流星の低級と名のつく装備カード1枚を手札に加える事ができる。』

「この効果で今さっきスターペガサスで手札に加えた、流星のスターソルジャーを特殊召喚出来るぜ。
だがな、それだけじゃないぜっ。

この瞬間、さっきスターペガサスの効果で墓地に送った、残りのモンスター。流星のスタービースト2体の効果を墓地から発動するぜ」

【流星のスタービースト

レベル3 光属性 獣族 効果攻撃力2000 守備力2300
オリジナル】

『このカードは通常召喚出来ない。』

このカードが流星のとの名のつくモンスターの効果により墓地に送られた時、このカード特殊召喚する事ができる。

この効果特殊召喚に成功した時、このカードのレベルを1上げる又は下げる事ができる。』

「フツハツハツハツハ。」

俺はこの効果で墓地からレベル4と3のスタービーストそれぞれと手札からスターソルジャー1体を特殊するぜ！！ ヒイツアツハツハツハツハ！！」

満足の極みに浸り、高笑いを見せる安岡のフィールドに新たに2体の緑に輝く星で飾り付けられた、二本足の白い毛のクマと血のように赤く輝く星で飾り付けられた黒く禍々しい鎧の兵士がそれぞれ、流星となって安岡の場に現れる。

それを見たランは先程の自身の予測が的中した事により、安岡のスターシンクロの特性が自分の考えの範疇である事を確信する。

「（やはり俺の考えるとおり、スターシンクロの基本性能はシンクロ召喚を前提とした展開コントロールギミックだ。」

だとすればもう一つの特性である、天に輝く星座は恐らく、モンスターを展開し終わった後にそれらを支配する。玉座に当たるカードを意味しているのだろう。さって、果たしてその星は従来の常識を打ち砕く程の光星か、はたまたただのちっぽけな流れ星に過ぎないか。

確かめさせて貰おうか」

果たしてランは安岡の大軍のモンスターの攻撃を凌げるのか？
そして、ランの言うスターモンスターのエースとは？

次回に続く

第7話 流星スターシンクロ（後書き）

次回第8話 計略逆カウンタータクティクス
お楽しみに。

第8話 計略、逆カウンタータクティクス（前書き）

読者の皆様いつもお読み頂き誠に有り難うございます。

まず、お詫びしなければいけないのは二ヶ月以上もの間、一切の小説活動を停止してしまっていた事です。その間、読者の皆様には大変なご迷惑をおかけしてしまいまして本当に申し訳ありません。

自分が読者の皆様様の期待と信頼を裏切ってしまった事は本当に自分自身の自業自得であり、その事で皆様方にご迷惑を掛けてしまった事に何より、反省致します。本当にすみませんでした。

こんな事を言いますと言い訳ですが、この数カ月は個人の生活上の理由により、なかなか小説活動とこのサイトへのアクセスが出来ませんでした。

本当に言い訳ですみません。特にわざわざご感想をお書き下さった、風の旅人様には本当に長い間、ご返事も出来ずに居まして、誠に申し訳が有りません。

この後、ちゃんとご返事を書かせ頂きます。

後、それらにもまして、申し訳なく思うのはこの前置きの場で、長々と長い文章でこの場を埋めてしまっている事です。

本当に何から何まですみません。

それで読者の皆様様が未熟者以下の私をお許し頂けるなら、これからも私の作品をお読みになってくださいましたら何よりも嬉しいです。

改めてまして、皆様これからよろしくお願い致します。

それでは長くなりましたが本編をお読みにください。

本当に居間まで申し訳有りませんでした。

第8話 計略、逆カウンタータクティクス

タイタニア学園一年校舎で徒達の公然の中。

当人同士の私闘と言う形でランと安岡の互いの家名の相続権を掛けたデュエルは、序盤のリバースカード五枚セットのみと言うランの不敵なプレイタクティクスを皮切りに、対する安岡はそれを無視する程の熱狂的な殺意のエネルギーを持って、最新技術を搭載したスターモンスターの大軍高速展開を容易に成功させてしまう。

これにより勝敗の近郊が一気に安岡に傾くかに見えた。……少なくともこの時点では。

「フツワツハツハツハツハ！！ どうだっ、まだ誰も手にしたことのない世界で唯一この俺と言う最高、最強のデュエリストのみに使用を許された世界最強のスターモンスターの大军を目の前にした気分はっ？」

現在安岡の場には流星のと名のつくモンスターはスターペガサスが1体、スターソルジャーが1体、そして自身の特殊効果によりレベルを3と4に変更したスタービーストがそれぞれ1体ずつ存在している。

これ等のカードのテキスト性能は以下の通り、現行の存在するカー

ドの性能を著しく逸脱した物となっている。

【流星のスターペガサス レベル4 光属性 獣族 効果攻撃力1700 守備力1200 オリジナル】

『このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、自分のデッキを上から5枚めくりその中の流星のと名のつくモンスターを全て墓地に送り、残りのカードを好きな順番でデッキの上に戻す。その後墓地に送ったレベル4以下の流星のと名のつくモンスター1体を選択して手札に加える。

手札からレベル1の流星のと名のつくモンスター1体を特殊召喚する事ができる。この効果を発動する場合、このターンこのカードは攻撃する事ができない。この効果は1ターンに1度しか使用できない。』

【流星のスターソルジャーレベル3 光属性 戦士族 効果 攻撃力1400 守備力1000 オリジナル】

『このカードは流星のと名のつくモンスターの効果で手札に加わった時、特殊召喚する事ができる。』

この効果で特殊された時、デッキから流星の低級と名のつく装備カード1枚を手札に加える事ができる。』

【流星のスタービースト

レベル3 光属性 獣族 効果攻撃力2000 守備力2300
オリジナル】

『このカードは通常召喚出来ない。』

このカードが流星のと名のつくモンスターの効果により墓地に送られた時、このカードを特殊召喚する事ができる。

この効果で特殊召喚に成功した時、このカードのレベルを1上げる又は下げる事ができる。』

安岡は自身のフィールド上に並ぶ、最新技術の塊である四体のスターモンスターを目の当たりにし。

彼等が放つ威圧感とオーラに酔いしれて、込み上げてくる感情の渦を自分自身の大きな自信に無理矢理変換してしまう。

そしてその自信を持ってして、ランに対し安岡は自分の権力と力を見せ付けると、更なる紅葉感にその身を焦がす。

そしてその安岡の姿に答えるかのように、周囲でその様子を観戦していた生徒達はざわざわと思いい思いの意見を述べ始める。

「すっ、スゲーー！！　こんな簡単に数が出るモンスター見たことないぜっ。

しかも手札をほとんど消耗してねえー、凄すぎるぜっ！！」

「うわあー、キラキラしてて凄いキレイ」

「アレいくら位するのかな、高そうっ。でも欲しいなあ、売ってくれないかな」

「へん、調子に乗ってんじゃないぞっ！！　別にてめえが強いんじゃないくて、そのカードが強すぎるんだよっ。

あと、相手してるそっちの口だけ野郎が弱ええーっだけなんだよっ、勘違いすんなっ負け犬っ！！」

今この校舎で先頭を切ってこのデュエルの観戦をしている生徒達の大半はこの学園で圧政を行っている貴族とエリートの子で合っ

して、彼ら以外の一般の生徒達は観戦はしているモノの彼らから少し後ろに距離を取り、恐怖心からか彼らはその貴族生徒達の周囲の様子に過敏に反応して秒単位でその視線を彼らへと向け、その顔色を盛んに伺っている。

その彼らの瞳は今にも壊れてしまいそうな程に、酷く疲れきっており、彼らが如何に苦悩を強いられてきたかを物語っている……。

そんな彼ら以外にも、この校舎には他にもそれぞれの理由と目的からこのデュエルを見守っている者達がいる。

その内の二人がこの学園の兼職の教師である明日香と綾音の二人である。

二人はランが安岡とその部下達の、一人の女子生徒への暴力による暴行を公然と阻害し。尚且つ、その女子生徒の為に自身の家督の相続権を賭けてまで、安岡にデュエルを挑んだランの真意と実力を見定め。

尚且つ、その真意と実力が彼女らが求めうる物で有れば。二人はランと話をして、自分達の所属する反タイタニア勢力の大きな後ろ楯になって貰い、更にはラン自身にも自分達の陣営に馳せ参じて貰う積もりでいた。

「な、なんてカードなのっ！！ たった一枚の手札の消耗で、一気に四体のモンスターを召喚するなんてっ。

しかも、対する須藤君のフィールドにはモンスターが1体も存在して居ないわ。ただ、五枚のリバースカードが伏せて有るだけっ。

このままじゃ彼、やられるわっ！！ 綾音っ、どうするのよっ!？」

明日香は安岡の加熱な攻勢を前に、彼女にしては珍しく声をあらげ

て鳥見だし。隣に居る綾音に目線を合わせると自分の不安感を彼女えと理不尽にぶつけた。

本来の明日香なら、いくら圧倒的多数のモンスターの数を、目の前に並べ立てられたとしても、五枚も伏せられているリバーズカードの存在とその戦術的有利性を軽視して、無秩序に鳥見だす様なことはしないだろう。

一時は綾音の励ましと自己自制により、自暴自棄からは脱したとはいえ。

明日香のこれまでのタイタニアでの苦悩と苦しみは、彼女の心と矜持^{うじ}に取り返しのつかない程の深い傷を与えており、それは彼女一人の自制心と忍耐力でどうにかできるレベルを大きく超えてしまっている。

無論、そのことは彼女がこの学園に着任してからこの一年間、常に明日香の隣で彼女共に苦悩し、日々を分かち合ってきた。言わば親友と呼び合える中である、芹沢綾音の知るところである。

「大丈夫、心配ないわ。

と、言うよりまだ。戦局が決する局面じゃないわ。明日香はこのところ忙しくて余りデュエルをする余裕がなかったから、ただ、単にストイックな場面に過敏になってるだけだわ」

明日香の現状を理解している綾音は、当然の事ながらこれ以上の彼女えの心労の蓄積を防ぐ為に。先程までよりも柔らかみの有る口調と態度で、笑みを浮かべ。彼女にそう言い渡す。

すると明日香も綾音の言葉に納得したのか、再び冷静さを取り戻すと綾音にごめん、ありがとう。と言うと、彼女も納得したのかそれ

以上何も言わず、再び二人は共にランのデュエルにその視線と興味を戻していった。

そして、そんな彼女達以外にもこのデュエルを、それぞれの立場上の状況と理由により、見守っている者達も居る。

「4対0。……（でも、多分相手の数はこのターンで、五体全てを、埋め尽くすと想うし。

其を予め、五枚のリバースカードを仕掛けたこの人が、想像してないとも思えない。

恐らくあのランさんのデッキは、単に罠を仕掛けて相手の行動を邪魔して時給作で。相手のデッキ消耗を誘って、その弱った隙に一気に攻めてワンターンキルを狙う様な在り来たりな物じゃない気がするな。

でも、もしかしたら私の勘違いかも知れないけど？

少しの間、ランさんを見た印象だけ。あの人は多分、相手の多数のモンスターの、攻勢を一気に受け流して、その多数のモンスターとそのプレイヤーを、正面から自分の中心のモンスターとそれを最大限に活用した。最良の戦術で、相手を打ち倒す事に高い価値観とプライドを持っている。

自分勝手な思い込みかもしれないけど、あの人は、……ランさんは。……

ようやく見つけた私の、私の理想で、それ以上の私の探し求めた、私のパーフェクトな彼氏さんかも知れない。

はぁ。カッコイイ、あんな人が私の旦那様さんとして私の生きた愛の奴隷になって暮れたらと思うと。……

は、っう、うれしいい。フフツ……」

このやや、冷静さと危うさを併せ持ち、乙女チックな趣味を持つ少女の名前は。『雨水水奈』あまみず・しいな。

このデュエルの表面上の切っ掛けとなった少女である。

その彼女の推察する通り、ランの目的は最初から安岡に戦略レベルでの兵力の最大値を集結させ、後に戦術レベルで戦力の最大強化を促し。

それを、ギリギリの所で、紙一重で回避し。しかる後に一カ所に集めたこれら安岡の最主力を、自身の召喚した最主力により、挟撃して。撃破する積もりで居た。

その為にランは一見暴挙とも思える五枚のリバースカードセットと言う、奇策に打って出たのだ。

無論、安岡も罠の存在を懸念してはいる。だが、ランが事実無防備である以上、彼に限らず攻撃を躊躇う者もそうは居ないだろ。

特にこの時、安岡にはランの仕掛けた奇形を意に介す必要がなかった為でもある。

「流星のスターソルジャーが流星のと名のつくカードの効果で、特殊召喚したこの時。

俺はデッキから流星の低級と名のつく装備カード一枚を、手札に加える事ができる。

クックック、俺はデッキから流星の低級階級書を手札にするぜっ。

うっひっひっひっひ」

【流星の低級階級書
装備魔法 オリジナル】

『流星のと名のつくモンスターにのみ装備できる。
1ターンに一度、装備モンスターは指定したモンスター1体の全ての種族を得る。この効果を使用した時、装備モンスターは指定したモンスターの攻撃力分、攻撃力を下げる。
装備されたこのカードが、破壊以外で墓地に送られた時、このカードを自分の手札に加える。』

「フン、先程から幾度見ても、卿^{けい}の懦弱で貧相もない笑いは下品に尽きる。

その様な育ちの悪さを余り、臣下以外の外部に白昼にしては。卿^{けい}はまだしも、卿^{けい}以外の卿^{けい}の家族、親族のネズミに近しい小人の育ちを世に記することになる。

上位者からのささやかな助言だ。これからは余り、不埒な態度や振る舞いを自制して控えた方がいい。
でなければ先祖の有名に対して、卿^{けい}は申し訳の仕様がなйдらう？」

ランのこの説教を含んだ雄弁は、その内容も必ずしも誉められた物でないにしろ。

その態度と姿勢は完全に公人の例説を弁えた物であり、他人から非難を受けるものではない。

だが、それを白昼で受けた当の本人としては感受できないのは寧ろ、当然の事であり、先程からの彼に寛容でないランの態度と合わせて。

安岡の忍耐は限界の極地を向かえていた。

「てめええー、もうっ、ゆるさねっー！！
ぶっ殺して殺るぜっ！！」

「先程から卿^{けい}は、そう言っただけだが。俺はこの通り、まだ、現世に足を踏み止めている。

卿^{けい}に真にその才幹と器量が有るならば、強弁を駆使せず、実力と行動を持ってして、冥界の扉を打ち破り俺をバルハラなり、地獄なりに埋葬せしめれば良からう？

俺もこう見えて、少なくとも卿^{けい}や卿^{けい}の家族寄りかは多忙な境遇でな。急いで貰えれば有難い」

「クッ、なら。今すぐにてめえー、の望み通りしてやるぜええー
！！！！」

流星のスターペガサス効果発動。1ターンに一度、コイツの攻撃権を潰す変わりに手札から流星のスターと名のつくレベル1のモンスターを、1体特殊召喚するぜっ！！

現れろ、流星のスターペンギんっ！！」

召喚と共に青黒く輝く流星の光から同様の光を放つ。相京はあるが全身がまるで吸い込むかの様な青く黒々しい肌の、クリスタルで形成されたペンギンが姿を表した。

【流星のスターペンギン
レベル1 水属性 水族 チューナー 効果】

『このカードが召喚したターンに効果により、墓地に送られた時、デッキから同名のカードを1体特殊召喚、または手札に加える事ができる。』

遂に安岡は後の未来のデュエルを支配する。シンクロモンスターを呼ぶべくその力を有した未だ見ぬ、下部を呼んだ。ランの思惑通りに。

そして、ランが仕掛けた五枚のリバースカードがその活躍を間近にして、光を輝かせていた。

次回に続く

第8話 計略、逆カウンタータクティクス（後書き）

次回第9話 性能VS戦術
お楽しみに。

第9話 性能VS戦術（前書き）

いつも読んでくださる読者の皆さん、お待たせしました。

あと、この作品は今はオリジナルのオリカをメインに使っていますが、今のデュエルが終わったら市販のカードもメインに使っていく積もりです。

もし宜しければ皆様からカードのリクエストやオリジナルカードやオリジナルキャラクターの要望やアイデア等を頂けたら、物凄く嬉しいです。

お暇が有りましたら、宜しくお願い致します。

それでは本編です。

第9話 性能VS戦術

安岡が遂に召喚したチューナーモンスター流星のスターペンギンはランが予測し、その登場を待ち構えて居た、次世代の真デュエルシステムシンクロ召喚を可能にした。モンスターカードの一枚である。本来はまだ、チューナーモンスターを初め。シンクロモンスターはこの時点での時代では未だ正式な実用化までに至っていない。

当然、試作段階で有ろうとその様な高性能且つ、データの一切無い非公式なカードを相手にする以上、従来のプレイアビリティでは対応に限界があり、対処に困難が生じる事は自明である。

だが、その次世代の『力』（カード）を目の当たりにして、真っ向から『知恵』（戦術）で立ち向かおうとする者のが居た。

「（フツ、なかなかどうして、自分の思う通りにばかり事が運ぶのか。

順調なのは良いが、何をやってもこうも苦勞無く全てを完遂できると合っては。この先、俺の人生も実に退屈極まる。

せめて、俺以外にもこの世界での価値観で、俺より利得の高い人間が一人や二人位は居て欲しいものだが。……

まあ、余り大言壮語を言うのも自重しておこうか。……

それにしても奴め。ここまでは非の打ち所も無く順調にその無能さを、遺憾無く発揮してるじゃないか。

この上は礼を持って、それに答え。奴の豪腕無知な無能さに更なる拍車をかけてやるとしようか）」

そうは言ってもまだ、ランの作戦は全てが完成してはおらず。

また、その戦略の性質上、安岡が今回のデュエルの核となるシンクロモンスターを、召喚しなければランとしては動きようがない。

そんな中。先程から冷静な視線でランとそのプレイタクティクスを、観察していた水奈が、その吸い込むかのように真っ赤に紅い硝子の様な美しい瞳を。

突然、キラキラと輝かせ。後ろに束ねた薄青く長い髪を揺らしながら、一言口にした。

「あつ、あのペンギン。可愛い。（きゃあ〜、かわいいいいい〜）
！！ あの子ほっしいい〜」

いいな、欲しいな、欲しいな欲しいな。盗んじゃお、かなっ？」

水奈の内面上の本来の性格は表面上の穏健で、男性に尽くす様な外見とは裏腹に。わがままで、思い込みが激しく、趣味の妄想と現実の区別がつかない事も少なく無い。

ただ、彼女自身は極めて冷静な知性と観察力を備えており、成績も基準値を上回ってはいる。

だが、その優秀さとは別に過去にその性格が原因でいくつもの不祥事を起こしている。

「いくぜ。俺はさっき手札に加えたマジック、流星の低級階級書を、流星のスターソルジャーに装備するぜっ」

【流星の低級階級書
装備魔法 オリジナル】

『流星のと名のつくモンスターにのみ装備できる。

1ターンに一度、装備モンスターは指定したモンスター1体の全ての種族を得る。この効果を使用した時、装備モンスターは指定したモンスターの攻撃力分、攻撃力を下げる。

装備されたこのカードが、破壊以外で墓地に送られた時、このカードを自分の手札に加える。』

光輝く流星の戦士に寺領されたこの低級階級は、所有者に元的主人への忠誠心強制させる。

「そして効果発動っ。

1ターンに一度っ、装備モンスターは指定したモンスター1体の攻撃力文の攻撃力を下げること、そのモンスターの全ての種族を自分の種族に加える事ができるぜっ!!

俺が対象に選ぶのは流星のスターペンギンだっ」

【流星のスターペンギン
レベル1 水属性 水族 チューナー 効果 攻撃力500 守備
力600】

『このカードが召喚したターンに効果により、墓地に送られた時、デッキから同名のカードを1体特殊召喚、または手札に加える事ができる。』

光輝く流星の戦士は同じく青々しい光を放つ自分よりも明らかに微弱なペンギンに、階級書に強制させられた形で膝枕着かされた。

「ホォー。蒙昧^{もつまい}な男にしては知略なカードを使う。（最も、使うのでは無くただ、単に使われて居るだけなのかも知れないがな）」

「ひっ、覚悟しろ。
俺はレベル4、スタービーストにレベル3、スターソルジャーをチューニングっ」

低級階級書の効果により自らの力の一部と引き換えに、スターペン

ギンのチューナーの力を得たスターソルジャーは、その身を光の円に変え。

その中にスタービーストを招き入れ、スタービーストを光えと変えると。互いに交わり一つの形になっていく。

「フツハハハハ。星と星交わるとき、流星の流れ中より王の下部しもべが現れる。星の力を奪えっ！！

シンクロ召喚、奴をぶっ殺せっ、流星王の使い悪魔ヒューベリオン。フツハツハツハツハ。これでお前もお仕舞いだぜっ！！」

「ハア、やはり卿けいは余りまともな教育を受けていなかった様だな。先程の台詞は良く誉めても幼稚的、言語寄生虫としか言い様が無いな。

もう少し漫画以外の真つ当な本を読む事を、卿けいに勧める」

と、ランはふてぶてしく言ったが、当然、今の安岡には聞く耳はなかった。

そんな安岡の自信のある自信と言葉を裏付けるかの様に姿を表した、そのヒューベリオンの姿は。

豪腕で力強く、それでいて全身をまばゆく美しい緑色の光が多い被る。

強さと魅了の美しさをあわせ持っていた。

そして安岡は、スターソルジャーに装備されていた流星の低級階級書をその効果により回収して手札に加えた。

また同時に、ヒューベリオンのその余りの美しさに観戦していた周囲の生徒達も感銘を受けて言葉を失っている。

【流星王の下部・ヒューベリオン レベル7 風属性 戦士族 シンクロ 流星のと名のつくチューナー1体以上×流星のと名のつくモンスター1体以上 効果 オリジナル 攻撃力3000 守備力1500】

『このカードは流星王ヴァーミリオンセレイドが自分フィールド上に存在する時、以下の効果を得る。』

このカードは戦闘では破壊されず、相手の魔法、トラップ、モンスター効果の対象にならない。

このカードが魔法またはトラップの効果で破壊されたバトルフェイズ終了時、手札から流星のと名のつくカード1枚を墓地に送る事で特殊召喚できる。

自分フィールド上に存在する流星王ヴァーミリオンセレイドが破壊される時、変わりにこのカードを身代わりに破壊する事で、流星王ヴァーミリオンセレイドの破壊を無効にする。』

「シ、シンクロ召喚っ？」

あ、綾音っ。な、何なの アレはっ!？」

確かに本来はシンクロ召喚は未だ、存在してい無いシステムで合つて、それに対して驚き不信感を持つのは、明日香に限らず至極当然な反応であると言える。

当然、そんな市場に出回って無い代物を綾音と言えど、知る筈もなかった。

「ごめんなさい、私にも分からないわ。

でも彼の父親の会社はインダストリアル・イリュージョン社とも繋がりが有るらしいから、まだ市場に出回って無い試作品を持っていたとしても可笑しくないわよ」

「そんな、それじゃ須藤君には勝ち目が無いじゃない。
どうするのよ綾音？」

「大丈夫よ、カードの性能の差がデュエルの勝敗の全てじゃないんだから。

いつも明日香が言っていたことじゃない。

それに私達教師がそれを肯定したら生徒達に一体何を教えるのよ。

明日香？」

綾音としてはそう言うしか妥当な選択肢はなかった。そして、当の明日香も今の綾音の答えに黙ったままだか、納得した様子で再び落ち着きそのまま綾音の顔をチラリと一目見ると、恥ずかしいのか直

ぐに目を反らしてそのままデュエルに視線を、戻していった。
綾音もその事は分かっており、それ以降何も言わずにただ、明日香を隣で見守って居た。

「（フツ、もおう、素直じゃないんだから）」

「（チューナー能力を模造した幻身の方を先に使ったと言う事は、少なくともこの後に第二陣が来るな。

なら、まだ仕掛ける必要も無いが、せめてこの上は奴の猪突を更に加速させるとしよう。）

フン、蒙昧もつまいにして愚かな貴族の馬鹿息子よ、卿けいは確かに優れた武器カードを所持している様だが、卿自身けいの実力と経験は乏しく、残念ながら卿の抵抗はあらゆる面において無益と言うしか他無い。

だが、俺は自分が寛容な人間だと言う自覚がある。

卿けいが望むならこの上は、これ以上の無益な争いを止め、互いにこのデュエルを放棄しても良いと俺は考えている。

卿けいにとってはこの上無い恩赦だと俺は思うが。……

フツ、何しろ卿けいは俺には遠く及ばないのだから……」

流石に安岡は気分を良くして要るとはいえ、ランの今の言葉に激しい程の怒りを露にする。

「あつ、俺が、てめえごときよりも、下だどつ？
誰に向かって言ってるんだっ！！　こらっー！！　ぶっ殺すぞっー
ー！！！」

「だから、その様な下級平民のチンビラ同然な振る舞いが、卿^{けい}を自
らが公人としても、詩人としても劣悪な欠陥遺伝子だと自己視聴し
ているのだと、何故分らない？」

「わかるかつ、そんなもん！？　要は今すぐにテメエーを、ぶっ
殺せばいいだけだろうがよっ！！！」

「まあな、ただし、そんな可能性は一分子も有りはしないと思うが」

依然としてランはその毅然とした態度を、崩しては居ない。
当然、そのランの態度は更なる安岡の怒りを増大させた。

「うるせつ、だったら、コイツを見ても同じ事が言えるがテメエー
ー。
俺は、レベル3、スタービーストとレベル4、スターペガサスにレ
ベル1スターペンギンをチューニングっー！！！」

先程と同じく、光の円に姿を変えたスターペンギンが二体の流星のモンスターを取り込み、交ざり合っていた。そして、光の中から一つの巨大な影が現れた。

「星と星を喰らいし冷徹なる流星の王よ、その絶対なる力を用いて、我が敵を喰らい尽くせ。シンクロ召喚っ。」

流星王ヴァーミリオンセレイドっおぉー！！」

【流星王ヴァーミリオンセレイド レベル8 闇属性 戦士族

シンクロ 流星のと名のつくチューナー1体×流星のと名のつくモンスター1体以上 効果 攻撃力2400 守備力2000 オリジナル】

『このカードが自分フィールド上に存在する時、相手の魔法、トラップの効果の対象になった流星のと名のつくモンスターはそのカードの効果が無効にして、破壊する事ができる。』

この効果を使用したモンスターは、このターン終了時に破壊される。このターンのエンドフェイズ時に、このターンのバトルフェイズ中に相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた流星のと名のつくモンスターを墓地に送る事で、1体につき相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを与える。』

光の中より、姿を表した巨大な影の正体は、全身から禍々しい黒い光を強く放ち、その力強く、豪腕な腕には自分と同じ程の大きさの禍々しい血に染まった長剣を持っている。

そして、その姿は先程のヒューベリオンとは違い、魅了的な美しさは一切無い。底に有るのはただ、禍々しく豪腕な凶悪さだけだった。

「フッヒッヘッヘッヘッへ。これで俺の勝ちだっ。
更に俺は手札からマジックをはっ」

安岡が慢心のまま続けて魔法カードを発動させようとした瞬間。
遂にランが動き出した。

「馬鹿がつ、カウンターリバーズ発動、昇天の黒角笛」

【昇天の黒角笛^{しょうてんのブラックホーン} カウンタートラップ 市販】

『相手モンスター1体の特殊召喚を無効にし、それを破壊する。』

「なにっ。だが、そんなもん怖かねーぞ。

ヒューベリオンでヴァーミリオンの破壊を身代わりで防げるんだよ、バーカっ」

「馬鹿がつ、余り勘違いをしないで貰いたいものだな」

「あっ？」

「更にカウンターリバース発動、死刑執行失敗による混乱。

このカードの効果で俺は先刻発動させた、昇天の黒角笛の発動を無効にして破壊する」

「な、なんだとっ。ば、ば、バーカっ!! あっはっはっはっは」

「綾音、これは!!」

「分からない。一体彼は何を仕様としているの？」

安岡を始め、このデュエル見ている者は皆、ランのこの行動を、単なるの乱心だと考えていた。
ただ一人を除いては。

「あの人は、ランさんは必ず勝つ。だから私はあの人を好きになるの」

第9話 性能VS戦術（後書き）

次回第10話 性能VS戦術中編
お楽しみに

第10話 性能VS戦術、中編（前書き）

改めてこの作品を読んで見ますとかなりテンポが遅いことに改めて気が付きました。

読者の皆様には大変申し訳無く思います。

この上はせめてストーリー展開だけでも、テンポを少しあげるつもりです。

読者の皆様にはできましたらこれからお読み続けて貰えたら嬉しいです。

それでは本編です。

第10話 性能VS戦術、中編

「あの人は、ランさんは必ず勝つ。だから私はあの人を好きになるの。……」
だから私だけの物にするわ……」

彼女の名前は『雨水水奈』 彼女の性格は、その見た目のか弱く穏やかな印象とは違い、自分の欲望に対して貪欲に強欲であり、執着心も人並み外れている。

勿論それは恋愛感情においても例外ではなかった。

一方、その恋愛対象の須藤蘭は今、乱心とも思える奇策を用いて安岡の高性能カードに対抗しようとしていた。

「俺は先刻発動させたカウンタートラップ、死刑執行失敗による混乱により。

やはり先刻発動させた昇天の黒描笛の発動を無効にして破壊する。

……

これがどうゆう意味か、卿^{けい}には分かるか？」

この問いを安岡は無視した。何故なら。

今現在安岡のフィールドには、豪腕強大な姿と力を有する二体のシンクロモンスターが存在している。

これ等の前には何をしてでも無駄だとの認識が有った為である。

【流星王の下部・ヒューベリオン レベル7 風属性 戦士族 シンクロ 流星のと名のつくチューナー1体以上×流星のと名のつくモンスター1体以上 効果 オリジナル 攻撃力3000 守備力1500】

『このカードは流星王ヴァーミリオンセレイドが自分フィールド上に存在する時、以下の効果を得る。

このカードは戦闘では破壊されず、相手の魔法、トラップ、モンスター効果の対象にならない。

このカードが魔法またはトラップの効果で破壊されたバトルフェイズ終了時、手札から流星のと名のつくカード1枚を墓地に送る事で特殊召喚できる。

自分フィールド上に存在する流星王ヴァーミリオンセレイドが破壊される時、変わりにこのカードを身代わりに破壊する事で、流星王ヴァーミリオンセレイドの破壊を無効にする。』

【流星王ヴァーミリオンセレイド レベル8 闇属性 戦士族 シンクロ 流星のと名のつくチューナー1体×流星のと名のつくモンスター1体以上 効果 攻撃力2400 守備力2000 オリ

ジナル】

『このカードが自分フィールド上に存在する時、相手の魔法、トラップの効果の対象になった流星のと名のつくモンスターはそのカードの効果が無効にして、破壊する事ができる。

この効果を使用したモンスターは、このターン終了時に破壊される。このターンのエンドフェイズ時に、このターンのバトルフェイズ中に相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた流星のと名のつくモンスターを墓地に送る事で、1体につき相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを与える。』

その内の1体ヴァーミリオンセイードの召喚時に、ランは相手モンスターの特召喚を無効にするトラップカード昇天の黒角笛を発動したが。

事もあるうがその発動に対して、チェーン発動（発動に対しての発動）をして自分自身のカードを破壊してしまった。

この奇怪な行動を見て周囲の観戦者は皆、ランが乱心したのだと考えた。

だが、それは違っていた。

【死刑執行失敗による混乱 カウンタートラップ オリジナル】

『自分が発動した相手モンスターの召喚・反転召喚・特殊召喚を無効にするカウンタートラップの、発動と効果を無効にして破壊する。このターンの間、相手フィールド上の全てのカードの効果を無効にする。』

また、このターンの間、相手プレイヤーは魔法・トラップの発動を行えない。』

「このカードがモンスターを対象にした自らのカウンタートラップを無効にした時、相手プレイヤーのこのターンのマジック、トラップの発動を停止させ。」

次に相手フィールド全てのカードテキストをこのターン、白紙に戻す」

「な、なんだとっ！！　そ、そんな変なカード聞いたことねっー。自分のカウンターをカウンターするカードなんてっ。」

「……フッ、此れだから貴族の馬鹿息子は蒙昧^{もうまい}だと言うんだっ。今少し知恵位は身に付けた方角いい。それが卿^{けい}の為であり、卿^{けい}の家族の今後の将来の為だ」

安岡のフィールド上の全てのカードにデュエルディスクからのエフ

エクト処理による虹色の光が降り注ぎ、その動きを止めてしまった。また、これ等のモンスターの登場と同時に安岡は、残り五枚の手札から魔法カード【双壁の元に集いし流星達】を発動して一気にランに攻勢を仕掛ける積もりでいた。だが、それは当初からのランの計画通り、紙一重で回避された。

【双壁の元に集いし流星達 通常魔法 オリジナル】

『このカードは自分フィールド上に流星王ヴァーミリオンセレイドと流星王の下部・ヒューベリオンが存在する時にのみ発動できる。自分の手札から流星のと名のつくモンスターを可能な限り、特殊召喚できる。』

この効果で特殊召喚したモンスターは効果が無効になり、アドバンス召喚とシンクロ召喚の為のリリースと素材にできない。

この効果で特殊召喚されたモンスターが相手に与えるダメージは攻撃力に関わらず500ポイントになり、攻撃したターンのエンドフェイズ終了時に破壊される。』

「く、くそがつ。（本当なら今頃このカードの効果で俺の場には三体のスターモンスターが並び、再びフィールドが五体で埋る筈だったのによっ。……」

まあいい。どうせただの悪足掻きだ、双壁とヴァーミリオンのコンボが無くてこのターンで倒せば良いだけだぜ。」

この期に及んで安岡は未だランの实力と才能を過小に見積もっている。

だが、それも次の瞬間には嫌を無く気づく事となる。

「そして、俺のカウンタートラップが自分自身のカウンタートラップに無力化されたこの瞬間。俺自身の勝利は確実の物となった。卿^{けい}には受け入れがたいがな」

現在ランの手札には残り一枚の手札がある。ランはその残る一枚を、自身の左腕に取り付けられているデュエルディスクの、今まで一向に使う気配のなかったモンスターカードゾーンにセットした。

「な、なに!?! お前それはどうゆう事とだっ!!」

「やっぱり、ランさ、……ううん、ランは私の思った通りのおとこ。ランは多分、次のターンで勝つなああ。

そうと決まればまた忙しくなるなっ、他にちよかい出される前にランに媚びって、速攻ゲットしちゃうから。

そうだなゲットしたらまず、間違はなく速攻でモテない女達の目の前でイチャイチャして……。そのあとは……ウッフッフフ………」

「俺が卿^{けい}を犬猫として飼うと言うことだ。……戦慄のアーカナイト・キルディ特殊召喚」

その言葉に安岡は臆したのか、ランを強くニヤ見付ける。するとランの正面に戦慄の黒い霧が突如として出現し、その中から血のように真っ赤に赤い鎧の甲冑を身に着けた、黒々しい大釜を片手にしている真紅の死神とも言える禍々しい存在が現れた。

【戦慄のアーカナイト・キルディ レベル7 火属性 戦士族 攻撃力2500 守備力0オリジナル】

『自分がコントロールするカウンタートラップの発動をカウンタートラップで無効にした場合のみ、手札からこのカードを特殊召喚する事ができる。』

この方法で特殊召喚に成功した時、以下の効果を発動できる。

手札が0の時、相手フィールド上のモンスター1体を破壊してそのモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える。

手札が一枚の時、互いに手札・フィールド・墓地から一枚ずつを選択してゲームから除外する。

手札が六枚以上の時、相手フィールド上のカードを全て破壊して、破壊したモンスターの攻撃力の合計分のダメージを与える。』

「な、なんだっ。ソイツはっ」

「このアーカナイト・キルディは自分自身の手で自らのカウンター
トラップを、カウンタートラップで無効にし、破壊した時に現れる。
召喚時、所有者に残存する手札枚数の数値に合わせた効果を発動す
る。」

今現在の俺の手札は0、フリーだ。よって第一の効果、戦慄の斬殺
が発動する」

アーカナイト・キルディはその手に持つ大金を、両手で大きく持ち
上げると、その体制のまま飛び上がり、上空から流星王に向けてそ
の釜の矛先を振り下ろした。
強靱で豪腕は姿を誇る流星王ヴァーミリオンセレイドも真紅の死神
の大金の前には、抵抗する隙がなく、気が付けば瞬きする一瞬の間
に真っ二つとなっていた。

「ば、ば、馬鹿なっ!!」

こ、こ、こ、この俺の流星王がな、何も出来ずに召喚した瞬間にや
られる何てっ!!……」

安岡の表情は今までの自信に溢れていた表情からは想像も出来ない位に暗く、絶望のどん底に転落した人間の顔えとなっていた。しかし、そこに更なる追撃が加えられた。

「無能者めっ、認識が遅いわ。戦慄のアーカナイト・キルディは破壊したモンスターの攻撃力の半数のダメージを、犠牲となった者に代わり仇として無能な主君に恨みを晴らす。

いつまでも駒がただ捨てられるのを待っていると思われては困るなっ。やれっ!!」

先程葬った流星王ヴァーミリオンセレイドと違い、アーカナイト・キルディの主君は安岡等と違い遥かに有能なデュエリストである。その為、キルディまるで意思があるかの様に無念に散ってしまった敵に思いを馳せるかの如く、自らの主君はの勅命に従い流星王ヴァーミリオンセレイドどの無能は主君にえと、その怒りの矛を振り下ろした。

「うっぐわあああー」

安岡は自らの浅はかさが原因で、むざむざと犠牲にってしまった、

自分自身の怨みの怨念をその身で受けた。

安岡もランも共に無傷の4000ポイントのライフを有していたが、ランに先駆けて安岡がその身に流星王ヴァーミリオンセレイドの攻撃力の半分の数値、1200のダメージを受けて現在のライフポイントの残量は2800に減少した。

「す、凄いあの圧倒的不利な状況から、一気に形勢を逆転するなんてっ。

それにあんな変わったタクティクスは見たことがないわ」

「だから言ったでしょ？

彼は大丈夫だって。明日香」

「ええ、そうね。私さっきからどうかしてたみたいね。

本当にごめんなさい、綾音」

「なあにそれ。さっきまでとは全然態度が違うじゃない。

それにまだ状況が五部になっただけで勝った訳じゃないんだから」

「ええ、分かってる。でも今は何となくだけど、彼がラン君が負けるような気がしないのよ」

「あら、いつの間に名字からファーストネームに呼び方を買えたの？ やっぱりに彼に恋でもした？」

「え、ば、馬鹿っ。名字よりもこっちのそうが呼びやすいからつい、口が滑っただけよ。」

それよりも綾音、貴方さっきから須藤君のこと随分と気にしている見たいけど、本当は綾音が彼に恋したんじゃないの？」

「残念だけど今は違うわ。確かに彼、妙に母性本能を擽るけど6歳も年下の生徒を好きになる程、まだ仕事に飽きてないわよ、わたし」

綾音はぶらかせて居るが彼女が先程から殊更に明日香の機嫌を気にしていたのは、単に明日香の精神不安定だけに配慮していた訳ではない。

ただ、彼女の場合は明日香と違ってあやふやな物ではなく、彼女自身のコンプレックスが深く関わっており、彼女のランに対する感情

が全て恋愛に向かうとは思えない。
少なくともこの時点では。

「（あつ、そうだ！！　良いこと考えちゃったなあ！！　ランが勝つたら、当然ランは私に借りてるディスクを返すんだから、その時についでに私をナンパしたあのばかねもちから、さっきの可愛くてお値段の高いあのペンギン。……
ルビーに入ってたからルビペン。アレを慰謝料代わりにもらっちゃえっ。うんうん私ってかあしこいなっ）」

こうしてランに対する本当の脅威がすぐ側に迫っていた。
だが、ランも明日香もそれをしては居なかった。

次回に続く

第10話 性能VS戦術、中編（後書き）

次回第11話 性能VS戦術後編お楽しみに。

第11話 性能VS戦術、後編（前書き）

読者の皆様、いつもお読み頂き有り難うございます。

今回でようやくスターシンクロとの、デュエルシーンが終局を迎える事になりました。

ここまでお読み下さって、読者の皆様には誠に感謝致します。有り難うございました。これから宜しくお願い申し上げます。

次のデュエルでは、オリジナルのオリカを一切使わずに、市販のカードのみでデュエルシーン展開させて貰いたいと思います。

それでは本編です。

第11話 性能VS戦術、後編

「さあ、どうした？ 忘れていないとは思いますがまだ卿のターンだ。同時に最後のターンだが……。この上は精々派手に躍り狂って、哀れにも惨めな最後を迎えるところを楽しみに鑑賞させて貰うでしょう」

「

未だ勝敗の奇数は、決してはいないが、状況は安岡が不利である。ランの仕掛けたトラップの受注にハマリ、このターンの間、全てのフィールド上のカードの効果が無効去れており、尚且つ手札からの魔法及びトラップの発動も封じられている。

更には頼みの綱で有った、流星王ヴァーミリオンセレイドも、召喚と同時に破壊去れてしまい、今現在安岡の手元に残っているのは、ヴァーミリオンセレイドの消失と共に、その特殊能力が無効となり、ただの攻撃力3000のモンスターと化した、流星王の下部・ヒーベリオンのみである。

【流星王の下部・ヒーベリオン レベル7 風属性 戦士族 シンクロ 流星のとの名のつくチューナー1体以上×流星のとの名のつくモンスター1体以上 効果 オリジナル 攻撃力3000 守備力1500】

『このカードは流星王ヴァーミリオンセレイドが自分フィールド上に存在する時、以下の効果を得る。』

このカードは戦闘では破壊されず、相手の魔法、トラップ、モンスター効果の対象にならない。

このカードが魔法またはトラップの効果で破壊されたバトルフェイズ終了時、手札から流星のと名のつくカード1枚を墓地に送る事で特殊召喚できる。

自分フィールド上に存在する流星王ヴァーミリオンセレイドが破壊される時、変わりにこのカードを身代わりに破壊する事で、流星王ヴァーミリオンセレイドの破壊を無効にする。』

「くっ、くそ、調子に乗りやがって」

一方、対するランは先程までの守勢状態から、一転して一気に攻勢に転じ様としていた。

【戦慄のアーカナイト・キルディ レベル7 火属性 戦士族 攻撃力2500 守備力0 オリジナル】

『自分がコントロールするカウンタートラップの発動をカウンタートラップで無効にした場合のみ、手札からこのカードを特殊召喚する事ができる。』

この方法で特殊召喚に成功した時、以下の効果を発動できる。

手札が0の時、相手フィールド上のモンスター1体を破壊してそのモンスターの攻撃力の半分のダメージを与える。

手札が一枚の時、互いに手札・フィールド・墓地から一枚ずつを選択してゲームから除外する。

手札が六枚以上の時、相手フィールド上のカードを全て破壊して、破壊したモンスターの攻撃力の合計分のダメージを与える。』

今現在ランには戦慄のアーカナイト・キルディ、一体のみが戦力として存在しており、現在の安岡の残存する2800のライフポイントに致命傷を与えるには十分な数値である。

もし、このターンの戦闘フェイズに安岡が攻撃し、その瞬間にランの新たなトラップが、安岡の現有戦力であるヒューベリオンを、破壊ないし、フィールドから除外すれば、何の対抗策も無い安岡の事実上の敗北は必死である。

安岡もそのことは分かっており、この上の迂闊な攻撃を控える積もりにでいた。

だが、それこそが、ランの目的であり、策なのではないかと安岡は新たに考え始め、迷った挙げ句、結局は攻撃する事に決めた。

「(迷ってても、しかたねえー。どうせ、次のターンも、ヒューベリオンは役に立たねーんだ。」

それに次のターンに、モンスターを召喚したら、また、さっきと似たようなトラップが、発動してまた、同じようなモンスターが出てくるかも知れねっ。

ただっら、ここは一か八か、攻撃して奴のモンスターを破壊して、また状況逆転してやるぜ」

安岡の考えは、ランの戦術が相手の召喚に対しての、カウンタートラップを逆にカウンターする事により、それに対応したモンスターを召喚するのだから、此方がこれ以上のモンスター召喚をしなければ、ランもこれ以上のモンスター召喚ができないと考えたからである。

今、ランの残存するモンスターを戦場で破壊できれば、上記の考え通りランのモンスター召喚を封じて、自分が一方的にランを攻撃できると考えた為である。

だから、安岡は危険を承知で合えて攻撃を選択した。

「い、いくぜっ！！ ヒューベリオンで、お前のアーカナイト・キルディに攻撃っ！！」

「フンッ、卿けいの考えは分からなくともないが、戦術的には失策だな」

「なっ、なにい！？」

「リバーストラップ、魔法の筒マジック・シリンドラーを発動する……。
卿けいは終わりだ……」

「な、な、なっ、なんだとっ!!」

「驚くことはない、卿けいは俺に気圧され、その挙げ句思い込まされた
だけだ。」

俺のタクティクスが自らのカウンターを、カウンターする事により、
モンスター召喚を行う逆カウンターサモンだとな……
だから、卿けいが懦弱にもそう考え、愚かにもこの暴挙に打って出てく
る事は、このデュエルを卿けいに持ち掛ける前から分かっていた事だ」

「そ、そ、そっ、れじゃ、このデュエルは最初から俺のっ……」

「ああ、卿けいが、惨めにも地面にのたうち、感情のまま没落の限界点
を迎える事は、俺が戦略レベルでこの作戦を構想し、戦術レベルで
実行に移した、時点で紛れもなく決定されていた事だ!!」

ランの言った通り、最初から五枚のリバースカードも、逆カウンターによるアーカナイト・キルディ召喚も、全てはこの必殺の一撃で安岡を完全に絶命せしめる為の、伏線であり、囷で有ったのだ。この通常のデュエルの子組みでは到底、当てはまらない、タクティクスこそが、ランが傭兵家と異名奉られている由縁である。そして、この結果を選択したのはランの言う通り、紛れもなく安岡自身なのである。

マジック・シリンダー
【魔法の筒 通常トラップ 市販】

『相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える。』

安岡の攻撃宣言の命令を聞き入れた、ヒューベリオンはその命令に従い、アーカナイト・キルディに向けて、その豪腕で力強い腕から鉄拳を繰り出した。

だが、次の瞬間に、正面には巨大な赤色の筒が二つ現れ、その内の一つにヒューベリオンが体ごと吸い込まれた。

そして、もう片方の筒から先程吸い込まれた、ヒューベリオンがそのままの体制で吐き出されて、そのまま一直線に主である安岡の体を、その豪腕は拳で貫いた。

「ぐううーわああー……」

安岡の現在のライフポイントは2800点、対してヒューベリオンの攻撃力はそれを上回る、3000ポイント。

これにより、安岡の残存ライフに3000点のダメージが与えられて、そのライフポイントの残存はマイナスを割る。

安岡残存ライフポイントー200ポイント。

安岡のライフが0を下回った事により、このデュエルの勝敗を双方のデュエルディスクが認識し、互いのソリット・ビジョン（立体画像）を停止した。

「凄い……」

（えへへ、すごい、すごい。この私の予想外してこのターンで勝っちゃうんだもん。

ランは私の彼氏さんにごうかく、合格！！ 大ごおーかあくっ！！ うっひひひ、楽しみだな、その完璧なランを、これから私の好みに調教できるなんてっ、ヨダレが出てきちゃう。エッへへ、たっのしみっだなぁっ！！」

デュエルが終了したと同時に安岡は地面に倒れこみ、うなだれる。

「ちくしょう、ちくしょうっ、ちくしょうおっーーーー！！」

それを見た貴族、エリートの生徒達はこれ見よがしに、彼に追い撃ちとなる罵声を浴びせかける。

「ははは、このクズ、能無しのバーカ！！ 死ねっ！！ アッハッハッハッハ」

「そうそう、泣く暇が有るなら今すぐに死んでよね。勿論、あのキラキラ光ってて、きれいなカードは私が貰ってあげるから、土下座して感謝しなさいね。
てへっ、エッへへへ」

「ちょ、なにいつてんのよ！！ この単細胞の目くそ、鼻くその馬鹿男のカードは、全部私の物なんだから、手を出すんじゃないわよ！！」

罵声を浴びせていた女子生徒達は、安岡のスターシンクロのカードの所持の権利を安岡に断りなく、視聴し始める。
それを見た雨水水奈は。

「(はっ、ちゃ、チャーンス!!)」

水奈は何をおもったか、倒れこんでいる安岡の頭の上にまで近づき、ポケットからハンカチを取り出して安岡に手渡す。

「もう、泣かないください。安岡先輩。これ、使ってください。私の気持ちです(きったった顔、ブツサイクも良いとこだなっ)」

「なっ、なんで俺なんかの為に? 俺はお前を捕まえて乱暴しようとしたのに……。何故だっ?」

「そんなの関係無いです。(おまえのデッキが欲しいからに決まってるん、じゃん、バーカ。)人が泣いてるのは悲しいじゃないですか、それに……ッ」

「うん?」

「それは、その……」

水奈な安岡にだけ、聞こえる様に耳元で答えた。
その時、顔を少し赤らめて。

「笑わないでくさいね。私……、先輩に一目惚れしちゃったみたいなんですっ……、あ、は、恥ずかしい。
(ウエツ、きもちわるっ)」

「えっ!? 俺を、俺なんかを? (ま、ま、ま、マジかあああー
ー!!! い、今まで一度も、コクられたことなかったのに、それが
一目惚れして、無理やり自分の物にしようとした、相手も俺のことを
一目惚れして、好きになってくれてたなんてっ。き、奇跡だっ!
! 奇跡が起こったあっ!!!) 良いのか本当に俺で?」

「はい、勿論です。(そんな訳ないじゃんっ、キモーイ、コイツ。)
でも、恥ずかしーいので、最初はお友だちからでっ、お願いした
いです。駄目ですか?」

「い、いや、そ、それでいいぜ、っいや、それでいいよ。アツハハ。
ハ。(もち、オーケー。ヤッターー!!! これで俺も彼女ゲットだ

っ！！）」

「は、はい、ありがとうございます。これから宜しくですっ。(ウエツ、キモコイツ、さーてっと、止めと行こーとっ)

あ、あの、須藤さん、私はこの通り、節でしたし、あの……その……この人を許しては貰えませんか？

もし、不服なら、私がこの人の変わりに責任を取りますから」

水奈は下心剥き出しの内面を隠したまま、ランに安岡との契約の免除を願い出る。

勿論、これは水奈の計算である。ランがその条件を飲めば、安岡の家の相続権の変わりに自分がランの彼女となると、言い出す積もりで居た。

もちろん、断った場合も、安岡に貴方の身の回りの物が恋人の証しに欲しい等と言い出し、スターモンスターをデッキごと合法的に貰い受ける積もりで居た。

その水奈の思惑を知ってか知らずか、ランは寛大な答えを返す。

「フツ、ミス水奈、君は優しいな……。良いだろう……。私もこれ以上の無益な争いを望むものではない……。ただし」

ランは水奈の正面上の包容力溢れる、態度と瞳に魅了されたのか、口調が先程間での俺から、私に口調を変えている。この口調はランにとっては、友愛や畏敬の念を表す物である。

「ただし、なんですか？

（何でもいいから、コイツのデッキだけはちようだいねっ。

お札に貴方も貰ってっ、あゝげちゃゝうからっね）」

「彼は今まで、今回君にしたのと、同様の非道な行為を、恥知らずにも続けてきた訳です。

それを無条件で感受する訳にはいかない。

それに、今回のデュエルの戦略的目的は、奴ごときの相続権を支柱にすること等ではなく、この相続権を盾にして、これ以上の他生徒への圧政を、制限させて貰うただ、それだけです。

ただし、其処で地面に這いつくばっている、野蛮人が承諾すればの話ですが……」

ランは水奈の隣で地面に這いつくばっている安岡に、鋭い眼光を向けると、挑戦的な態度で堂々といい放った。

そして、安岡は惨めな態度と顔つきで、立ち上がり口を開いた。

「あ、ああ、おま、いや、アンタがそれで勘弁してくれるなら、俺

は構わねえー。 (それにもう、そんなことは関係ねえ。
だって、この俺に遂に本物の彼女が出来たんだ。
もう、そんな詰まらねえ、ことしてる場合じゃねー。 ひっ
ヒヒ、これから忙しくなるぞ……)」

次回に続く。

第11話 性能VS戦術、後編（後書き）

次回第12話 殺意の瞳を持つ少女
お楽しみに。

第12話 殺意の瞳を持つ少女（前書き）

読者の皆様、いつもお読み頂き誠に有り難うございます。

誠に申し訳ありません。

又しても、1ヶ月も更新が遅れてしまいました。

本当にすみません。

もし、それでも読者の皆様はこの作品を、お読み頂けましたなら誠に嬉しいです。

それでは読者の皆様今後も、どうか宜しくお願い致します。

それでは本編です。お楽しみください。

第12話 殺意の瞳を持つ少女

ランに敗北した安岡は、一度は敗北の風に当てられ、地面へと、落ち込むが。

その失意の最中にある、安岡の心の間隙を突いて、水奈は、安岡の所持するスターシンクロデッキを、合法的にてにいれる為に、いわゆる、アメとムチの、ムチの状態にある安岡に、アメの優しさを与える積もりで、献身的な女を演じて、安岡に近づいたのだった。

一方の安岡は、そんな水奈の胸の内を知らずに、水奈が心底、水奈が自分を好いているのだと、思い。

その嬉しさの余り、彼は足の力を抜き、再び廊下に座り込むと。自らの指で自分自身の頬を、捻ると。

その痛みの余波を噛み締めて、今現在のこの現状が、幻などではなく、真の理で有ることを痛烈に確めたのであった。

そして、彼は、これから先の水奈の心証を良くするためにも、先程までの非礼を詫びるために、水奈に何か、贈り物をするつもりで居た。

その、安岡の打算を、知ってか知らずか。水奈は安岡にトドメとなる、最後の攻勢を掛ける。

「（さあーって、それじゃー、トドメ。フィニッシューっ！）
さあー、安岡さん。お顔を上げて、立ってください。
（ウゼー）

いつまでも廊下に体を着けていると、ご洋服とお体が、汚れてしま

いますし。

(べつつーに。生きてるだっけでっ、きつあな〜あ〜いっ。
おっまえ、みたいなごっみ、ワーっシッ、ねばっーっ!!

わっはっはっはっは!!）廊下の冷たさに当たって、お風邪を引いてしまいますよ。

（結核になって、死んじやえばつああー。――）

そうだったら、大変です。さあー、この手をお掴みください。（きめっーいい、こいつっ！！）

私なんかの手では、反って、安岡さんのお指が汚れてしまうかもしれません……。

（きたつなつ、……そう。コイツの手。

後でちゃんと、消毒しとこつと。）

で、でも、私。つ安岡さんみたいな、その……す、素敵な男の方に……、わ、私の指を掴んで貰えたら、す、凄く、嬉しいです。

（あああ、きめ、きめー、きつめーっえええーっ！！こ
れの逆を、イケメンが私にしてくれたらなあっ。どっして、世の中
のイケメンは、向こうから、私に迫り寄ってくれねえーんだっ
？

わつたしには、きめーばつか、来るし。此方から迫つて、軽くストしたり、軽くカンカメしたり、したぐらいで。

ストーリーだとか、変態だとか、言われて、札『警察』には、通報されるし。

バカ親どもには、こんな、クズゴミばっかつの、ゴミタニアなんかに、流されるしよつ。世の中ろくが、なーい、ぜっーと!!

あつはつはつは！！
あつはははは！！

まーいいつや。そのお陰で、私の理想のイケメンタイプのらーんに。出会えちゃったんだからっ。

そう、出会っちゃたから仕方ないよねっ。

また、スト、スト、しちやおつと。

楽しみ楽しみ、だっなあー！！にへっはははは」

雨水水奈。彼女がこのタイタニア学園に入学して来たのには、些かの事情がある。

彼女は以前からいわゆる、美形の男性に対して、ストーカーや盗撮等を含む、数多くの事件を起こしており。

その事が原因で以前から、水奈の両親達は、彼女が事件を起こす度に。彼女を様々な所に、移転させていたが。

彼女は、その行く先々で、同様の事件を繰り返しており。更には、今回。彼女は殺人未遂事件を、起こしており。

それが原因で、今回、両親達から勘当同然で、このタイタニア学園に入学させられたのである。

勿論、今までも、彼女は幾度も警察によって、更正センターや強制収容所に送られようとはしたが。

その度に、彼女の両親が働き掛けて、彼女の罪を免責で済ませてきたが。

今回ばかりは、彼女の両親も、彼女を何処かの施設に送る積もりだった。

だが、やはり、彼女の両親達は、彼女の将来と世間体を考えて、このタイタニア学園に入学させたのである。

無論、彼女には、これが最後の機会であり。このチャンスを、潰して、再び問題を起こせば、彼女の両親も、今度こそ彼女を、強制収容所に送る事を、彼女につたえていた。

だが、そんな両親の寛容さを無視して、水奈は、この後、ランに交際を申し出て。それが拒否去れたなら、ランに対して、今までと同様にストーカーや盗撮等を行う積もりで居た。

一方、そんな事とはいざ知らず、安岡は、水奈の腕を掴み、立ち上がると。

内心では、先程の水奈の自分への、献身的な態度の余韻に浸ってい

「(きたった、きたった、キターーーっ!!)」

ここは、一気、ストレートに、フイーニッシューーっ!!)」

それは、安岡さんのデュエリストとしての、魂が宿った。安岡さんのそのデッキです……。

(お前にそのデッキは、キモメンにマーメイド、だよーーんだっ!!
きめーー)

もし、『あなたが』良いのなら、私は貴方の、デュエリストとしての、魂を、いつも身に付けて、あなたと心を共にしたいから。

(うげ、キモチワールイーG!!)」

「えっ、(お、俺の心を四六時中、身に付けて、俺と心を、シンクロスタイだってっええ!!)」

こ、こんな、嬉しいこと、今まで一度も、言われたことねえーーよ。

お、俺、幸せだーーぜ!!)」

も、勿論、い、良いぜ。

そうゆうことなら、貰ってくれ!!) 今すぐ、貰ってくれ(貰ってください。俺の女神様っ!!)」

安岡は、あわてふためいた様子で、左腕に取り付けてあるデュエルディスクの、デッキホルダーに手を伸ばし。其処に納められている、先程のランとのデュエルで使用したデッキを取り出すと。みすぼらしい眼差しを向けている水奈の瞳に、一瞬、心、奪われるが直ぐ様に水奈の手元へと、デッキを手渡した。

「……有り難うございます……。(うぎい、キモ。)
安岡さんだと思って、毎日肌身離さず大切にしますね……。 (だり
ーっな。)
ありがとうございます。本当に……。 (ホントに、ホントに、ばあ
かつ、だな。おまえばーっか!!
イヤッ、ホー！ー！！
わっはっはっはっはっ!!)」

水奈は安岡からデッキを受け取ると、直ぐ様、自分の征服のポケッ
トにしまった。

そして、その光景を目の当たりにしていたランは、水奈の腹黒い本
性を、見抜いていた訳ではなかったが。水奈が故意に、安岡に博愛
を用いて、彼からスターシクロのデッキを合法的に譲り受けよう
としていた事は、保々、正確に洞察していた。

同時に彼は、そんな水奈の強か(したたか)さに、酷く感心してお
り。

そのような知略に優れ、臨機応変に其をやったのける、その行動力
とを併せ持つ水奈に、尊敬の念を向けると共に、彼女に一目置こう
と考えていた。

彼は、自説として、性別的に女性の方角男性よりも、知略に優れて
いる、と、言う考え方を思想している。彼はその考えが絶対的な、
この世の真理の摂理なのだと思っており、だからこそ、彼が女性に
対して潜在的な魅力を見出させるのは、自分に匹敵する知性と、見
識を併せ持つ、知的で非常に効率的な認識力を持った者のみである。
それ故にランは、今まで婚約者である矢月玲奈に対して、恋愛感情
の最たる部分である、性別的な性的感情を見出だすことが出来ずに
いたのであった。

そして、それが今日に至る間でのランとレナとの間に亀裂を呼び込む大きな原因となっていた。

「（ふうん、なかなかどうして、女性と言うのは、強か（したたか）に抜け目無い。ッは、それにしてもこの安岡と言う男、駄目だない！！　まるで相手の立場と事情を理解して、その上で相手を信用すると言うする、初歩的なマキャベリズムの対処法が出来ていないな。この程度の器量と才覚では、俺がやらずとも、何れ奴の一族の命運は、その当主（安岡）の無知無能な放蕩と、共に滅亡へと記するのは自明。

それも、その当主の器量が逆の意味で、多量なのだから、その選択しも無数にある。

今のように、女性に全ての代参とその地位を追われるか。

又は、ビジネス上の計略に会い、全てを失うか。

はたまた、自分より、能力の高い部下にその地位を奪われるか。

なんにしても、俺が思い煩わせる筋の事でも無いか。ま、俺にできるのは差し詰め、奴が、本来ミス水奈が自分に対して、何の友愛も純愛も抱いていないと、おそばせながら気が付いた時、当然奴は、ミス水奈に対して寛容では居られないだろう。

奴が逆上した時にこそ、俺に少なからずの出番も、回ってこようもの。

ま、待つのには余りそう嫌いじゃないが、気長に待つとしようか。それよりも）

ミス水奈、お礼を言うのが少し遅れてしまったが、先程は君の貸してくれたデュエルディスクのお陰で、助かった。

有り難う。このディスクは慎んで君に返すよ」

「い、いいえ、とんでもない。……私の方こそ助けと頂いて本当に有り難うございます。……助かりました。」

（ああ、ホントに助かった、助かったよ。あんがとラン。アンタに会えて、良かった。お陰で、この三年間、退屈しなくて済むから。私からお礼に、アンタを私だけの物にしちゃーうーから、ツね!!

分かってる!?)」

水奈にディスクを返した後、ランは共にこのタイタニア学園に入学して来た二人の内の一人、親友の一之瀬土門の所に駆け寄り、再び彼と行動を共に使用とした。

「おい、終わった様だな。今回も楽勝だっただな」

「別に行動その物は、単純だったが、その行動の基盤となる戦略を組み立てるのには、それなりの時間を要したかな。」

……洪の30分ばかりがなっ」

「ふ、と言っても、俺とこの校舎を歩き回っていた間に、適当に考えた作戦で有ってして、本気なんがこれポッチも出してないんだろ?」

「っふ、まあな。わかってるじゃないか。
流石に五流貴族とは違うな」

「当たり前だっ。俺でもお前が天才いや、異脳で有ること位はわかる。」

お前の出来の悪い義理の兄弟達とは違ってな」

「そうか……」

ランは一言そう言った後、口を閉ざすと、一之瀬に軽く笑みを返し。
直ぐ様明日香達に向かって歩き始めた。
だか、この時ランは知らなかった。将来、今この校舎に居る女性の
一人と逆説的な状況下で告白を果たし、結ばれるで有ろう事を。
そして、その未来の運命人の候補の一人である、一人の少女がラン
に対して殺意みなぎる眼差しを、その黒々しく吸い込むような宇宙
の深淵にも似た、瞳と共に向けていた。

「須藤欄。ようやく見つけた……。
必ず、必ず彼奴に、相応の報いを味わせてやる……！！ 必ず、必

ずだっ!!!

絶対に許しはしないからなッ!!」

この長髪の手入れが行き届いた、美しい黒髪の少女の名前は、飯塚いいづか
・あやみ
文美

彼女は、自分でも押さえきれない程の、怒りと殺意をランに対して抱いている。だが、それも、彼女がランと直接対する時、違う感情へと変わる事を、彼女又、この時、知らされては居なかった。

次回に続く。

第12話 殺意の瞳を持つ少女（後書き）

次回第13話 疑問と恐怖
お楽しみに。

第13話 疑問と恐怖（前書き）

読者の皆様、いつもお読み頂き誠に有り難うございます。

今回は、早めに更新する事が出来ました。

今後もこのペースで、更新出来る様に頑張らせて頂きたいと、思います。

あと、宜しければ、読者の皆様からのこの作品に対するご意見や注
意点等を、お聞かせ頂ければ、嬉しいです。

お暇が出来ましたら、宜しくお願い致します。

それでは本編です。お楽しみください。

第13話 疑問と恐怖

後に、革命の後に待ち受ける悲劇の序章と呼ばれる、安岡とランのこの戦いは。序盤、安岡に圧倒的有利で展開したが、結果として安岡は僅か1ターン、それも自分の開始ターンに敗北するという、誰も予想だになかった結果に終わる。

その結果に周囲の大多数の者は、驚くと言うより、寧ろ勝負の結果自体よりも敗北した、安岡の姿にこの植えなくこうふんした様子を見せていた。

だが、一方で、彼等とは違う意見を述べるも者も、幾人かは居た。

「す、凄い。逆1ターンキルなんて……。こんなデュエルが、簡単にできる、ここまでのレベルの、生徒は早々居ないわ……。

もし、彼に、私達に同調してくれる意志が、有るなら。

このデュエルの内容を見る限りの、彼の器量と才幹は、私達の大きな力になる。……それに、明日香。アンタの左遷の件も有るし、なにがなんでも、今日中に彼を味方に引き込んで、彼に手を打って貰わないと、困るわ」

「ええ、分かってる。でも、本当に彼、味方になって暮れればいいけど……」

「もう、どうしたのよ、明日香っ。そんなに弱気になって？
ンタらしくないわよ。」

綾音の言った通り、明日香の表情は彼女が普段から知っている強気で、生き生きとしていた以前の頃とは違い。どこか重苦しく、悩みを抱えている様な様子でいる。

「別に、そう言う訳じゃないけど……、ただ……」

「ただ、どうしたの？」

「私は、彼が……、須藤君が、怖い……」。

単なる私の誹謗かも知れないけど、私には彼が、単なる学生には思えない。

何処がどうかは、うまく言えないけど。ただ、言い知れない鋭い恐怖を、彼から感じるのよ……。っ可笑しいわね、私？」

「別に可笑しくなんかないわよ……。ねえ知ってる、明日香？ 出

来の良い生徒に悩む女教師の姿は、出来の良い息子に悩む、母親の姿と同じだってことを。

自分一人で何でもできて、何の手の掛からない、息子に対して。興味を持ちつつも、その子が何を考えているかが、逆に分からなくなつて、怖くなる。

で、結局は何もせずに放置仕様とする。

けど、それが何かの切っ掛けが、起こると、一変して息子と親密になる。

すると、その母親は、今度は息子に対して、必要以上の愛情を注ぎ始める。

今まで、構ってあげられなかった、言え、構って貰えなかった分を、埋める様にね。

でも、それが度を越し始めると、今度は息子の方角拒絶し、反発し始める。

そうになると殊更、恋人や友人等と、過す様になり、母親と一線を置くようになる。

すると、母親は、息子の友人達、特に恋人に嫉妬と憎悪を、集中し始めるようになるわ……。

その後の結果が、どうなるかは、余り、考えたくないけど。私は、明日香にはそうなって貰いたくはないわ」

綾音の例えは、今の明日香の状況から、起こり得ない事ではなかったが。

余りに飛躍しすぎており、明日香としてはこのような抽象的なことを、真剣に語っている綾音に感心は元より、怒るのも通り越してただ、呆れ返るしかなかった。だが、この様な会話は綾音と友人関係を築いてからの明日香に取っては、日常的なことであり、今更さして、珍しくもなかった。

綾音は確かに明日香以上に冷静沈着で、知略に優れ、見識も22歳とは思えない程、豊かである。

更には、綾音のデュエルの腕前と知識は、保健の教師で有るにも関わらず、このタイタニア学園随一で有り。

明日香でさへ、凌ぐものである。

更に、綾音は幼少の頃より日本でも有数の選ばれたエリート中のエリートしか、教育されることが許されない。ある特殊な教育機関で教育されており。

そこを卒業した後も、世界有数の有名大学を、僅か18の頃に、首席で卒業して、今に至っている。

にも関わらず、綾音の周囲への態度と接し方は、選ばれたエリートの其ではなく、礼節と公平な態度で有り。地位や身分等で人を判断せず、自分より能力の劣る者も見下したりもせず、同等の立場で接している。

彼女に取っては、与えられた教育の違いで他人と自らを、区別し、差別することなど何の興味も無いことなのである。

だからこそ、彼女は数多くの平民出身の、生徒達からの支持を得ていたのである。

だが、当然、貴族や同じ、エリート出身の教師や生徒達からは、異端視されており。彼女を、何を考えているか分からない変わり者だと、称する意見がタイタニアの圧政側からだけではなく。

味方の陣営で有る、解放側の教員達からも、出ている程であるからして。

彼女が如何に、常人の枠組みの範疇外の人格を有しているかが分かる。

勿論、彼女が変わり者だと呼ばれるには、他にも理由が存在する。その最たる物が、彼女の経歴と、彼女個人の物事の捉え方の遅延からくる、ギャップである。

彼女自身の、見識と認識力は、無論ゆうに常人の其を越える程では有るが、それ故に彼女の例え話や表現は。

余りに飛躍の特化が激しく。彼女以外の者には、そうそう、その全てを理解出来る者が居ない為である。

彼女も、それは分かっているのか、公式の間では一般に常識と去れている、万人の表現を多用するようにはなったが。それでも、彼女の表現力は独特で、同じエリート出身の者からも、異常だと、意味嫌われて孤立を余儀なくしていた。

それでも、明日香と出会い。友人になったことで、彼女は、無理に他人に合わせるのではなく、本来の自分自身の有り様で、他者に接して、いこうと考え始める事ができたのである。

そして、その事を教えて暮れた、明日香に対して。恩義を感じており、彼女の力になろうと、これまで明日香に色々と配慮を配っていたので有った。

「ハアアー。ねえー、綾音。私がそんな教師や母親になるように見える？」

「うーん、そうねえ。明日香なら、そこまですとは言わないけど、案外過保護な母親にはなると思うな。」

何しろ、明日香は、優しくて強い癖に、どうしようもない寂しがりやなんだから。

でも、明日香なら、彼に^{ラシ}対して、ちゃんとした恋愛として、感情を保て行けると私は思うなっ」

「ハアア、どうして、貴方の話しはいつも恋愛になるのよ？」

「別に嫌がることでも無いでしょうに。私達もいつまでも、独身として、若さをもてあます訳にも行かないんだし。」

それに、私が言いたかったのは、感情や印象なんて、その時の捉え方で変わる物なんだから、それに支配されて物事を悪い方向に持っていくなんて、馬鹿馬鹿し、事なんだって、言いたかっただけなんだから」

とは言うものの、実はこの時。綾音も明日香と同様に、ランに対し漠然とした不安感を感じてはいた。

ただし、それは、明日香の感じている様な得体の知れない恐怖心等ではなく。

ランの予想以上に高過ぎる器量と才幹が、彼のこれまでの行動の無秩序さと、ある重要な疑問を、彼女に強く印象付けていた為である。その疑問とは、詰まり。何故ランはこのタイタニア学園に来たのか？

先程のデュエルを見て、綾音はその疑問を考えずには居られなかった。

綾音は、ランの器量と見識は、自分に拮抗する程の物だと考えており。そのランが明らかに彼に取って、何の得とはならない筈の、このタイタニア学園の平民生徒達の為に態々、他の貴族達の不況を買ってまで、この学園の平民生徒や自分達の力になろうと言う理由が分からないで居た。

何しろ、能力は拮抗するとは言え。綾音と違いランは、この学園の教員でもなければ、関係者で有る訳でもない。

そして、決定的な違いは、ランは、綾音とは違い世界的な有名企業

を統べる、貴族の身分に身を置く者であると、言う事である。

最初は、綾音もランが、抽象的な学生らしい正義感で、この学園にやって来て、あの様な抽象的な演説をしたのだと、考えていたが。ランの高い能力を見て、ランがその様な抽象的で浅はかな人間では無いことを証明していた。

だが、その一方で、ランのこれまでの行動の無秩序さが、綾音には、ランがわざとその様な態度を取って要るのではないかと、思えてならなくなっていた。

詰まり、この行動事態がランの何かしらの目的を達成する為の、戦略ではないのかと。漠然とした不安が綾音の脳裏を掠めていたのだった。

そして、二人がランに対して、互いに考えを考えを巡らせていた時。その当事者である須藤欄も、友人たる一之瀬との話を終えたと。この学園の女教師の養子の中で、その美しさ故に双璧と称されている二人の美女、女教師の元へと足を進め、その眼中に全身を去らした。

「初めまして、御初にお目にかかります。

須藤欄と申します。以後お見知りおきを……。

ですが、どうやら貴女方は、後日ではなく、今早急に、私にご用がお有りのご様子……。

……違いますか？」

ランが、多少ふてぶてしい態度で、そう言い放った。すると、明日香は、少し驚いた様子を見せたが。

一方で、綾音は、ランが既に自分達の存在と状況を知っていたのだと、分かり。その上で、彼が、自分達に接触してきたのだと分かっ

た。

「ええ、その通り。私たちは、早急に貴方の助けを、必要としているわ。

……貴方さえ今良ければ、少し、私たちの話を聞いてくれないかしら？」

綾音は、少し、上目遣いで、母性的な口調で言い放った。

「勿論、一向に構いません。寧ろ、御美しい美女、お二人からの、お誘い。慎んでお受けしなければ、無礼と言えるでしょう。

それに、そのような八方美人に、これ以上ストーリーカー紛いに備考させた、有っては。下劣と万人に称されるのは、なんら疑いがないですからね！！」

「い、誤解よっ！！ それは単なる行き違いでっ」

「っわかっています。洪の細やかな社交的冗談ですよ。えっと」

「天上院明日香よっ。で、こっちが」

「芹沢綾音よっ。須藤くんこれから宜しくね。

特に、こっちの明日香は、今は彼氏は居ないし、それにさっきから君の事ばかり、気にしていたのよ。気が向いたら、デート位は誘ってあげてね。頼んだわよ!!」

「ちょ、ちょっと!!　なに言い出すのよっ!!　馬鹿なこと言わないでよっ!!」

「もおう、そんなに怒らないでよ。洪の細やかな社交的冗談よっ。ね!!」

「つもうつ、貴方達は……」

「ごめん、ごめん。

それよりも、そろそろ行きましょ。時間も余り無いことだし。ね、須藤くん!!」

「分かりました。ですが、どちらに参られるのですか？」

「行けばわかるわ。でも、私意で言えば、男の子が大好きな、純白のベッドが置いてある、良いところ……かな」

この時ランは、彼女達の話す、話の内容がわかっており、それに対する答えも既に考えていた。

踏み出した時、既にランは、決断していた。

そして、この決断が、後のこのタイタニア学園を大きく変える事を予測していたのは、この時。ランのみで有った。

次回に続く。

第13話 疑問と恐怖（後書き）

次回第14話 密会、前編
お楽しみに。

第14話 密会、前編（前書き）

読者の皆様、いつもお読み頂いて誠に有り難うございます。
少し遅くなりましたが。

ようやく更新できました。あと、余計かも知れませんが、私はこの
作品以外にも幾つかの作品を書いています。

もし、宜しければそれらもお読み頂けたら凄く嬉しい。

お暇が有りましたら、宜しくお願い致します。

あと、すみません。またお願いさせて頂きますが、読者の皆様、も
し、宜しければ今回の話に対してのご感想やご指摘などが有りましたら、今後の勉強の為に、送って頂ければ、凄く嬉しいです。

それでは、長くなりましたが本編の始まりです。

第14話 密会、前編

「行けばわかるわ。でも、私意で言えば、男の子が大好きな、純白のベッドが置いてある、良いところ……かな」

と、言うタイタニア学園、美の双壁の一人である赤毛の八方美人の甘い誘惑混じりの誘いに従い、連れられて来られたのは。

消毒液による独特の臭いと、全体的に白く清潔的な印象が神々しく脳裏に焼き付く空間に。純白の白さを保っている五つのベッドが設置されている、赤毛の八方美人の受け持ち区域テリトリーである。保健室だった。

このタイタニア学園において、この学園の不利益となる言動と活動をひたすらに取っている綾音違反、学園側の教師の立場は狭く。

彼らが自主的に集まり、統一的な意思の疎通を諮る為には、他の教師達に疎まわれることがない独立した根拠地が必要だった。

その為、彼らは同じ教員グループの中でも、教室や職員室等といった実質的に自分の専用の受け持ち区域テリトリーを持たない、教師ではなく。綾音の様に独立した持ち場を持つ。教師の受け持ち区域テリトリーに集まり、情報のやり取り等をしている。

「さあ、狭いところだけど、自分の部屋だと思って、羽を伸ばして楽しんで寛いでね。」

……明日香、貴方もよ。
今コーヒーを用意するから……」

「それで、ミス、いや、フロイライン。貴女方は、私に内々にかつ、早急にご相談したい事が有るとの事でしたか？」

五つあるベッドの内。真ん中の一つに座り、足を組んだ状態で、その正面のベッドに姿勢良く腰を下ろし、此方を見つめながら寛いでいる美の双壁の片割れである天上院明日香とこの受け持ち区域テリトリーの支配者である赤毛の八方美人を見つめ返しながら、彼女が入れてきたコーヒーを、若干意地らしく啜りながら図々しくも言い垂れた。

「ええ、その件に関して、早速だけど貴方をお願いしたい事があるの……。
実は……」

この赤毛の八方美人は、六歳も歳の下の貴族の門弟に、若干のうわべ目線を向けつづ。淡々とした軽快な口調で、これまでの自分達の情勢と現在の危機迫った状況をランに伝える。

綾音から伝えられた情報は。

第一に、先程ラン自身が直接カードを交え、打ち倒した安岡京介が、平民出身の女子生徒に暴行を加えていた為、明日香が仲裁に入った

が、それが原因で安岡の怒りを買う。

左遷させられつつある事。第二に、反タイタニア勢力と言っても、現在に至るまでの過程で、その保々全ての教員を、明日香同様に左遷やリストラ等による。

学園側からの圧力で、失っており。今現在、この学園に残って居るのは、この赤毛の八方美人を含めて、その片割れである金髪の完璧な体型ベスト・オブ・プロポーションを持つ、現在窮地の中に居る天上院明日香の、二名のみであること。

第三に、この学園の圧制教育に対しての平民出身の生徒達の戦意が今現在は、著しく減少しており。彼らの中にも、現在の状況に絶望し。抵抗活動を軽視する傾向と帰来が産まれつつあること。

これ等を踏まえて、綾音と明日香の美の双璧の二人は、ランに自分達への協力を申し出る。

すると、コーヒーを音を立てながら、軽快に啜るこの用兵家と異名奉られている若い貴族の門弟は。

待ち構えていたかのように即答で答え始めた。

「成る程、詳しい事情はわかりました。……宜しい、フロイライン明日香、貴女の左遷の件は、かの者（安岡）に話を通しておきましよう……。」

私などで宜しいのなら喜んで、協力差し上げましょう。フロイライン……。」

「有り難う、貴方ほどの人が、味方になってくれるなら私たちも心強いわ。」

でも……見ての通り、私たちには他の味方は居ないわ。ごめんなさ

い」

明日香は心底から申し訳無さそうに雄弁する。
その態度が、ランには可笑しく思えた。

「フロイライン、貴女方は何か誤解しているようですから言っておきます。

基数に置ける多数など、今のこの状況ではさして、問題では有りません。

と、言うのも、確かに多数で有ることは其れ丈で敵を拡散させ、敵の攻撃を集中させず。全滅防ぎ、長期的な活動が可能です。

ですが、それは、指揮系統の縦列化と混乱を呼び、統一された動きが取りにくくなりますし。

多数で居ることは、其れ丈で敵の警戒を強め。加熱な攻勢を呼ぶ、最大の原因にもなります。

現に、貴女方が、敗れたのも貴女方が多数による基数で有ったが、故です。

フロイライン明日香、貴女は少数で有ることを嘆きましたが、少数で有ればこそ、指揮系統の統一と機動力を確保する事が可能となります。……二人で十分なんですよ……。

……それに、駒と言うものは内からてにいれる物などではなく。外からてにいれる物。

だからこそ、駒は、駒として機能するのですから……」

ランは足を組んだまま、再びコーヒーのカップに手を掛けると。一口加えながら諭すように言う。
明日香はまるで教師と生徒の立場が入れ替わってしまったかのような心境でそれを啞然として聞く。

「……………」

綾音も、似たような心境だったが、淡々と的確に状況を見据える彼のカップにコーヒーのおかわりを、媚びるような目使いで、注ぎながら赤毛の八方美人は問いかけた。

「君の言う通りだとは思うわ。けど、具体的な勝算は有るのかしら？」

「無論、考えては居ます……」

「どんな考えかな、聞かせて貰えるかな？」

「なに、大したことは有りませんよ。このタイタニア学園の現状を打破するには。まず、大間かに二つの関門を処理すれば良いのです。その関門が何か、お分かりになりますか、フロイライン？」

「……詰まり、この学園の帝王学を受けた貴族や、エリート生徒達による。」

平民生徒達への圧制や苛めを、止めさせる事がまず、一つ。二つ目が、それらを誘発し、黙認している教師達を改めさせる、か。或いは彼らをこの学園から除外するか、の、二つねっ？」

「ええ、その通り。流石にお分かりですね。ではまず、前者ですが。これに関しては容易に、それも短期間に制圧、鎮圧し、クリアな状態にする事が可能でしょう。なんら問題も有りません」

ランの言葉に二人は同様に隠せず、思わず項垂れた声を漏らしてしまふ。

この貴族の若い門弟は、その赤毛の八方美人と金髪の白肌の美人の、驚きと疑問に満ち足りた表情を楽しむと。

再びカップに手を掛け、黒々しいコーヒーの中心に砂糖で固まった小さなブロックを二つ投げ込む。

それを悠長にも溶かしてから啜ると。ランは足を組み直し、体制を整えると、淡々と語り始めた。

「簡単なことですよ。貴女方教師も使用していることですが。この世界において、最も多用されて、乱用されている唯一絶対のこの世の真理を応用するのです。」

……つまり、少数による圧倒的多数の支配です。

……全体を百とすれば、その内の51パーセントを支柱にすれば、百と言う全体を支配する事ができます。

だが、悲しいかな、その51パーセントにも、この理論は等しく作用されます。

つまり、その半数強の26を。更に、その半数強の14を、……8を……5を……3を、と、淘汰され。

最後には最初の1のみが、等しく残ります。

今、この学園で平民生徒達に卑劣にも、弾圧を加えている高級生徒達にも。この理論は当てはまる。

すなわち、彼らの全体のグループとしてのコミュニティーを支配する1パーセントに当たる。者を見つけ出し、我々がそれに取って変われば、全体を容易に支配できる事、なんら疑い無い。

……そうは思いませんか？」

自信の表れからか、ランは笑みを浮かべ、そう言うと、綾音たちの反応を伺う。

「確かに、君の言う通りだと、思うけど。幾つか問題も有るんじゃない？」

貴方なら承知していると思うけど……」

綾音の言わんとしている所は、自分達はその1パーセントになりえたとして、果たして本当に全体を支柱にできるのか。

頭を押さえたところで、他の手足の部分全てが従うとは考えにくく。寧ろ、分裂した各グループが、個々に最集結を果たし、新たな支配体型を作り出し。

その中で自分たちは孤立するだけではないのか、と。綾音の意見は状況判断的に極めて正しく。且つ、冷静で有った。

だが、それに対してもランには明確な構想があり、それを二人に淡々と冷静に説明した。

ランの言うことはこうである。

まず、第一に、全体を支配した後、敵の幾つかのグループが、此方のコントロールから離れ、離脱して孤立を図った場合は。それら各グループに此方が用意した擬態となるグループを接触させて、彼らと手を組ませてそれらを、内部から操り、コントロール下に置く。一種の分割支配を行う。

そして、第二に、その方法を用いてもそれらを支配下に置けない場合は。

まず、何らかの方法で彼らを一ヶ所に集める。

ただし、このとき、敵が集結し終わるのを待つ必要はなく。

わざと、情報にタイムラグを付けて流し。敵が集結しようとする、そのルートを想定して、タイムラグを付けてそれらを各個に撃破していく。と、言う物だった。

これ等の説明の内容とその戦略的構想力からして、ランがただの十六歳の高校生でないことは明らかで。

そのことは綾音だけではなく。明日香の知るところとなり。

明日香は、ランのこの策に感銘に近い、念を抱いたが。

それでも綾音は、完全に納得しては居なかった。

「……確かに貴方の作戦はとても見事で、極めて完成度が高いけど。それでも、根本的なところで、問題が残ってるし。

それにもうひとつ、彼らを支配する生徒側の代表と、表では黙認して、その活動を裏で操る、教師側の代表も決める必要が有るわよ？」

「流石につ、鋭いですね。そこまでお分かりとは。

よろしい、まず、後者の方ですが、勿論生徒側の代表は、私が勤めさせて頂くとして。教員側の代表は、フロイライン綾音、貴女にお願ひできますか？」

ランがそう言うのと、綾音は一言も漏らさず、首を縦にふる。

それを見たランも、笑みを浮かべ、首を縦にふる、と。

納得した様子で、再びカップに手を掛け、コーヒーを二口にする。

「つふ、前者ですが、これもそう深く、考える必要は有りませんよ。それに昔から言うでしょう、組織や人が集まるコミュニティには、必ず、それにより一番利益を得る人間がそれを操り、支配すると」

「つまり、それを逆算して、探し当てると言うのね？」

「ええ、そうです。納得して頂けましたが？ フロイライン」

「ええ、納得したわ……。するしか無いもの。悔しいけど、君、頭が良いわね。……この様子だと、もうひとつの難問の、教師側の、いえ、この学園の経営方針その物に対しても、期待できる思案があると見て良いのかしら？」

綾音が、不敵な笑みを浮かべてそう言うと、明日香もそれを聞き、ランに期待の眼差しを向けた。

「ええー、それは勿論。ただし、次のことは私よりも寧ろ、貴女お二人に、特にフロイライン明日香に多大な負担を強いると思います。」

その御覚悟はありますか、フロイライン？」

その問いに対して明日香は、表情を引き締めると、決意した様子で、問いに答える。

「私は、今まであの子達を助けたい気持ちの一心で、この学園の教

師として、あの子達を助けようとしてきたわ。

でも、結果はいつも守る筈のあの子達を逆に苦しめていただけ。私は教師として、何もできなかった。想いは有っても、それを形にする術と、知恵が私にはなかったっ。

……でも、それが有るなら、その機会を与えられるならっ、私はどんな苦痛や痛みにも耐えて見せるっ!! もう……逃げたくない。……私は……」

明日香の感情を露にした態度に、何かを見出だした様子で、ランは言う。

「わかりました。全てお話ししましょう。ただし、フロイライン、コーヒーのお代わりを頂けますか。

実に美味しかった……」

首を捻り、笑みを浮かべると、ランは綾音にカップを差し出す。

それを見て、綾音はまるで上司にお茶汲みをさせられる秘書の様に、カップに黒々しいコーヒーを注ぎ入れる。

それにさっそく手を着けると、まるで好物にかぶり付く子供の様に、ランは啜り飲んだ。

次回に続く。

第14話 密会、前編（後書き）

次回第15話 密会、中編。
お楽しみに。

第15話 密会、中編（前書き）

読者の皆様様。

この作品をいつもお読み頂き誠に有り難う申し上げます。

又しても、1ヶ月強もの長い期間、小説作品の更新をストップしてしましまして、誠に申し訳御座いません。

長い間更新を止めていたにも関わらず、この作品をお読み続けて頂き読者の皆様様には、本当の感謝と誠に深い反省と、謝罪を申し上げます。

本当に有り難うございます。

そして、そのような状態にも関わらず、お気に入りまで、してくださった読者の皆様には。

心底よりの感謝と御詫びのお言葉以外は御座いません。

そして、これからはできる限り以上に、1週間以内、1ヶ月未満の更新ができますようにさせて頂きたく思います。

そして、最後になりますますが、今後、1週間以内に更新が有りませんでしたら、読者の皆様様には、お手数では御座いますが。

この作品か、私の方に更新の催促のご連絡を頂きましたら、その週の間以内に急ぎ更新させて頂きたいと思いますので、皆様にはお暇と、お氣が有りましたらで、かまいませんのでどうか宜しく御願い致します。

それでは、今回も長くなってしまいましたが、本編の始まりです。

第15話 密会、中編

タイタニア学園の赤毛の教員、芹沢綾音は。

目の前に居る六歳違いの明日より、教え子となる若く尊大な貴族の門弟の指先のマグカップに、まるで上司に媚を売る秘書のように自らが火を入れ、温めたコーヒーを注ぎ入れる。

ランはそれを、悠然としながら半分程まで飲み干すと。

先ほどまでとは何処と無く違った趣のある表情で、淡々と、しかし冷静に語り始める。

まず、最初にランは、綾音と明日香の二人にこのタイタニア学園の特殊形態を成している経営制度を利用する旨を伝える。

このタイタニア学園の経営上の最高責任者は、会長である【王条留弗夫】（おうじょうルドルフ）で有るが。

学園その物の実質的な最高責任権は、その一切の権利を校長の職に有る者有り、ルドルフは、その経営姿勢には一切の感心を示してはいない。

実のところ今現在に至るタイタニア学園の経営姿勢は、全て、今現在校長の地位にある悪島死斗あくじましねとによるものである。

その悪島も現在は病床に伏しており、近い内に校長の職を退くと噂されている。悪島が引退すれば、この学園の仕来たりにより、教頭の地位に居るものが自動的に次の校長となるのである。

つまり、現状では現在教頭である滝沢が、次の校長になり、そうなれば現在の経営姿勢は継続され続ける事になり。

そうなれば恐らく、明日香を含めた反対派の教員達は、今以上の窮地に陥る事になるだろう。

だが、ランの思案するところは、その滝沢と今現在のこの学園の不

当な生息を許さず、それどころか、加熱な戦略により彼らと共にその不当な経営思想を、一掃すると言えるものであると言えるだろう。

「このタイタニア学園では、創設者のルドルフ会長に指名される以外では。

基本的に教頭の職に着かない限りは、校長にはなれず、恐らくはその校長に。

時期校長に指名されることもまず無いでしょう……。ですが……。恋人や愛人ならば、話は異なり、状況の展開は劇的に回天を向かえることになりますかね……」

実のところ、ランは単なるユーモア（冗談）の積もりで、軽々しく口の端に述べただけではあるが。

彼の言うことは一部では最もであり、正論と呼んで差し支えはなかった。

が、それを聞かされた当の明日香や綾音に取っては皮肉以外の何物でもなく。

それに比例して、金髪の巨乳教師は目に見えて機嫌を乱し、顔を竦めて見せる。

「なら、貴方は黙って、あの子達が苦しむのを見たくないなら、私に校長の愛人になれとも言うの!？」

明日香は、しかめた表情で、鋭く尖った眼光を見せると、短気を持って余した口調で両手をテーブルに強く叩き付け。

その反動で立ち上がると、この目上に対して尊大で生意気な口先の貴族の若くする門弟に、そう強く罵声とも取れる虚勢を浴びせかけた。

「言え、何も、フロイライン方に、そのような無用で無益な生息を強制などさせは致しません。

だいたいそのような愚策、失策を殊更得意になって活用するのは、無能で恥知らずな小人以下の器量の、狭隘きょうあいで汚きならしく下等で劣等な人ならざる生物のごとき、生息を一生死ぬまで繰り返すようなやからであって。

何故、この私がそのような寄生虫どもの特性や性質の解明に着手しなければならぬのか？

いくら私が自身が保有する並々ならぬ順応性を活用して、戦略眼に応用していても。

奴らがごとき、寄生虫の性質や特性とそれを含めた構造などを得るために、寄生虫などと野合やごうして、奴らなどの知識やノウハウちしつを知悉したところで……一体……何の益が有るというのか？

……自らの手足で立って、歩んで行かない者は、人でも組織でも惨めな一生を辿たどっていき、衰れに朽ちていくだけだ。

そんな奴ら（人的寄生体）に何故、此方が真剣になって処遇を考えてやらなければならない……」

須藤欄ゆづりと友宜ともぎを持つ者の多くは、彼の非常に高く、達筆な見識や知略を、高く評価することだろう。

特に彼の戦略的な構想力、想像力は群を抜いて卓越しており、その能力と主権はデュエリストとしての枠組みを問わず、様々な分野に

おいて、常に高い水準を保っている。

だが、それらにもまして。須藤欄を知る者の大多数は、口を揃えて彼の露悪趣味とも呼べる、彼の児戯と悪癖の両者からなる嬌態にも似た言動を強く避難しており。

彼自身その事は把握しては居るが。

そのことが逆に、彼の悪癖を燻り、露悪趣味を彼の中の主権的な解釈上での、最大の美点へと、奉っている。

実のところ、これでも今回は、かなり控え目に纏められていると言える。

とは言うも、基本的にランは、公人として常識人であり、下品や野蠻、無知とは疎遠であり無縁である。

したがって、彼は冷笑なり憫笑なりをするにしても、露悪な言動を誇示したとしても、その表現は巧みな程に、華麗に美化されており。その雄弁の表現力自体は、本末転倒ではあるが、高く評価去れている。

そしてその事自体も、ランの児戯を増長させ、彼に露悪趣味を美化させる大きな要因となっている。実際この個室の空間で彼に対峙して居る、赤毛の八方美人と金髪の巨乳の二人の美人教師も、いささかではあるが、露悪をさらけ出していない時の彼の言動と通常時の格差から違和感を感じては居たが、それでも綾音等は彼女自身が、彼の露悪趣味と同格に位置するであろう曲解な表現や思考解釈等の言動を、常日頃から密に行っている事もあり。

初対面ながら、ランに対して親近感とも言うべき奇妙な感情が芽生える感覚が見て取れていた。

「ふっ……失礼、私としたことが、これは少し狭量が過ぎました。

……彼ら（人的寄生体）には彼らの描く、利益と主張とゆうものが有ると言うのに。

……っ無論フロイライン、貴女方御二人は違いますし……そうでは無く。

私はただ、単にそういう可能性と選択しも存在するのだと、言いたかっただけなんですから。

……同時に、それらの選択による後の結果により、もたらされる生息に人によつては、女性としての喜びや、矜持きやうじを見出だし。

誇りにするのだと、そういう感性や価値観などの、美学を持った女性も、この人類社会には本音や建前。

どちらを取っても、数多く居るのだと、そう言いたかったのですが……。

……どうやら、それ事態が、無用であり、不用であつたらしいですね……。

特にフロイライン明日香には、不快感を被らせてしまった様子でっ……。

どうもこれは私も無礼と不見識が過ぎました。
申し訳御座いませぬ。

……それと……どうやら私は、昔から回りくどい言い回しが過ぎるようで。

御二人が退屈なさらぬようと、冗談を言つたつもりなのですが、どうも逆に貴女を誤解させてしまった見たいで……これに関しましても非礼はお詫び致します。

誠に申し訳有りませぬ。

ですが、自分でも、悪癖が過ぎると分かつては居るのですが、どうもこれは不治の病と言うものらしく。

自分では修正のしようもなければ、治療法も有りませぬ故。
どうか、ご容赦、ご勘弁の程を……」

そうは言いつつも。

ランは、悪びれも、反省の色も見せず、片手のカップに口を着けると、ニヤリとしてコーヒーを一啜りにする。

その光景を目先で、間近にしている赤毛の八方美女はは、どうやら、全てを洞察していたらしく。

それまでの過程の様子を見て、我に帰り、くすみ笑いを浮かべている。

その親友であり、今までの会話の流れの過程において。

自己認識ではあるが、一方的に被害を被っていた、金髪の巨乳教師は、そんな赤毛の親友の解釈とは逆に、二人の態度と感性を目の当たりにした彼女は。

表面上は発露^{はつろ}な笑みを浮かべたが。

その実、内面では多少ではあるが、あきれ返っていたのも事実だった。

彼女は考えずには居られなかった。

彼も親友足る芹沢綾音と同様で、頭はいいが、独特の感性を持ち。

自分とは、思想や美的ユーモアのベクトルラインが根本的に違うのだと、彼女はそう頭の中で考えを導きだす。

そう考えると自分だけが激怒し、熱くなっていたのが、馬鹿らしく感じてきてくる。

同時に、二人に対して自分の今の嬌態^{きょうたい}を去らし、それを目撃された事に辱しめを感じると、頬を赤面で赤らめるが、

その表情は何処か、学生時代、デュエルアカデミア本校に通っていた時代の鋭気と活力に満ちていた時の、彼女のデュエルに対して、更には、その心に願っていた一人の意中の思い人に対して、常に向けられていた発露で、それで居て神々しさのある微笑みの表情を浮かべていた頃の明日香を、嘲笑うかのように。

あの時代の明日香の面影とは、真逆な彼女の表情がそこにはあった。だが、返ってそれが、今までこの学園に来てからの明日香の心と意識に、雲のように掛かっていた、極度の緊張感で作られたヴェールを、一時的ではあるが取り除き。

彼女に一時の落ち着きと冷静さに満ち足りた生息を取り戻させる。
そのまま、金髪の巨乳教師は、軽く息を整えると、ゆっくりとベッドに座り、腰を許すと同時に、姿勢を元に戻し思い立ったかのように、目の前の児戯こぎと悪癖に満ちた生意気な明日からの教え子に礼を返す。

「言え、私の方こそお願いする立場なのに言い過ぎたわ。

ごめんなさい。

許して貰えるといいんだけど？」

頭を少し下げて、謝罪をする明日香の姿を見て。

流石に自身の児戯こぎが過ぎたのだと、ランも自重の色を濃くしはじめると。姿勢をただし、明日香に一言返すと、自らずらした話のレールの修正を計る。

このタイタニア学園の校長へえ出世の過程は、通常の物とはかなりの部分で異なりを見せている。

まず、第一に現在の校長の地位に居る者が何らかの理由又は、その者の意思により引退、或いは移籍した場合は。

その下に居る教頭の地位に有るものがエスカレーター式に自動で、校長になるシステムを取っている。

これ自体はさして珍しくもないことだが。

肝心の教頭を任命するシステムと、その任命者が通常とは明らかに大きく異なっているため、それが大きな特徴の最たる部分となって居るのである。

このタイタニア学園には貴族の子弟のみで、構築されている生徒会が存在する。この生徒会の生徒会長に選ばれた者は、就任と共にこの学園の教員から一人を指名し、その者を教頭の職に着ける権利と

資格が与えられる。

そして、その生徒会長には、推薦した教員の権限の半数を与えられ。生徒会を通じて、この学園の校内のあらゆる施設の運営に関わる責任と、社会見学等に属する旅行先の決定権が与えられるのであった。この辺りの事情についてランは、赤毛の八方美人と金髪の巨乳教師の二人に、確認を取ると。

次に、これ等を含めた自らの戦略構想を二人の対局の色を持つ、美人教師達に語り始めた。

次回に続く。

第15話 密会、中編（後書き）

次回第16話 密会、後編 お楽しみに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n11111i/>

遊戯王GXデュエルタクティクス

2011年9月8日18時37分発行